

氷川姉妹18禁合同
Can we sleep tonight?







さめ

twitter@waaaa_sabi

好きなひなさよ体位
後背位

注意・18禁

日菜×紗夜メイン
紗夜×日菜
ふたなりあり

いしだ
twitter@guildmay

好きなひなさよ体位
寝バック



今日は大人しくしていなさい

え？

攻守逆転のお話



お、おねーちゃん？

おしたおし

たまには……私からお願いのよ

おしたおし



やったー！大好き！

きゅー

……姉としてやられっぱなしがイヤだからなんて言えないわね……

……



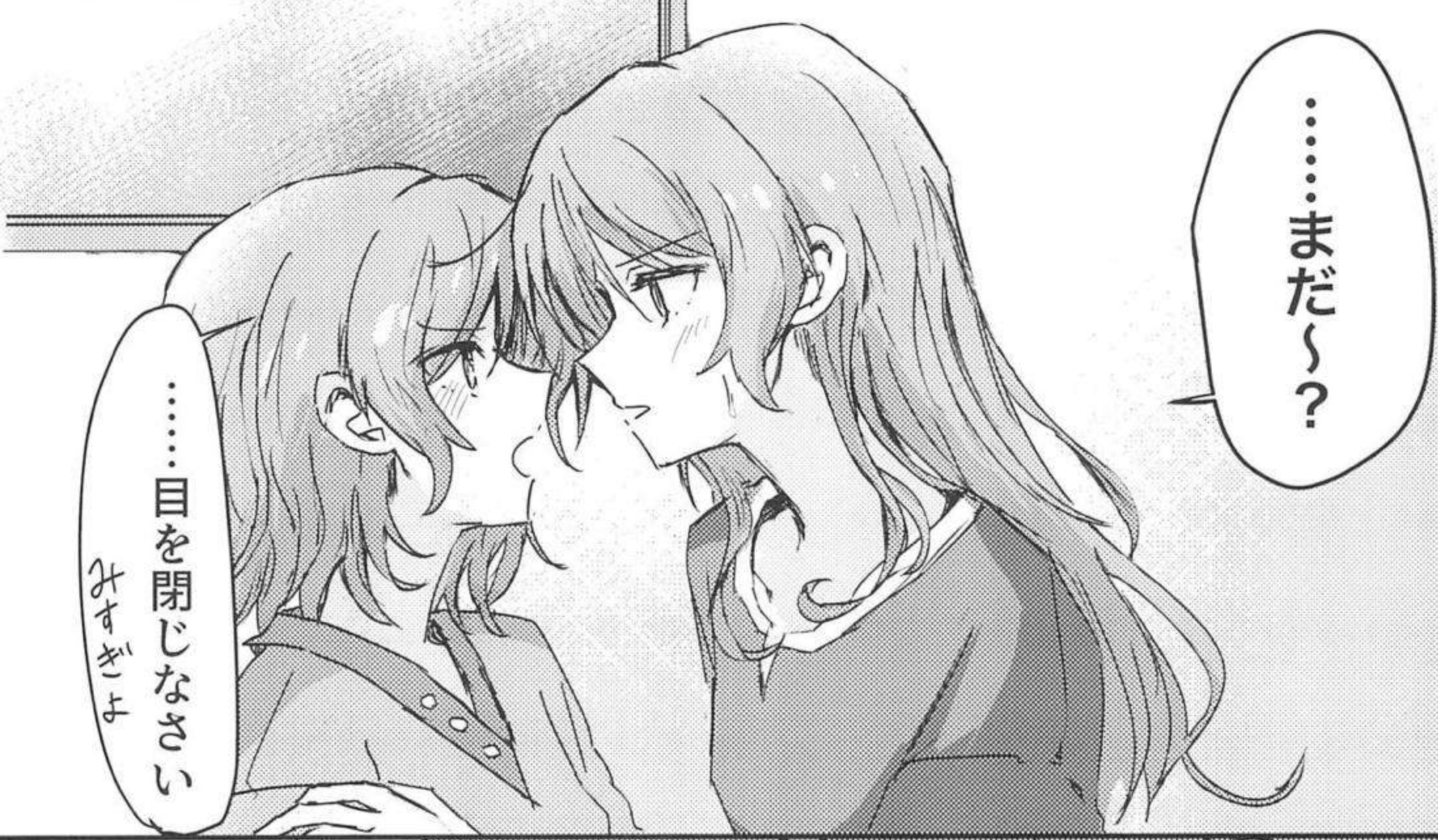
じー

……



わかったから
落ち着きなさい!

おねーちゃん!
はやく〜!
ちゅーして!



……目を閉じなさい
みすぎよ

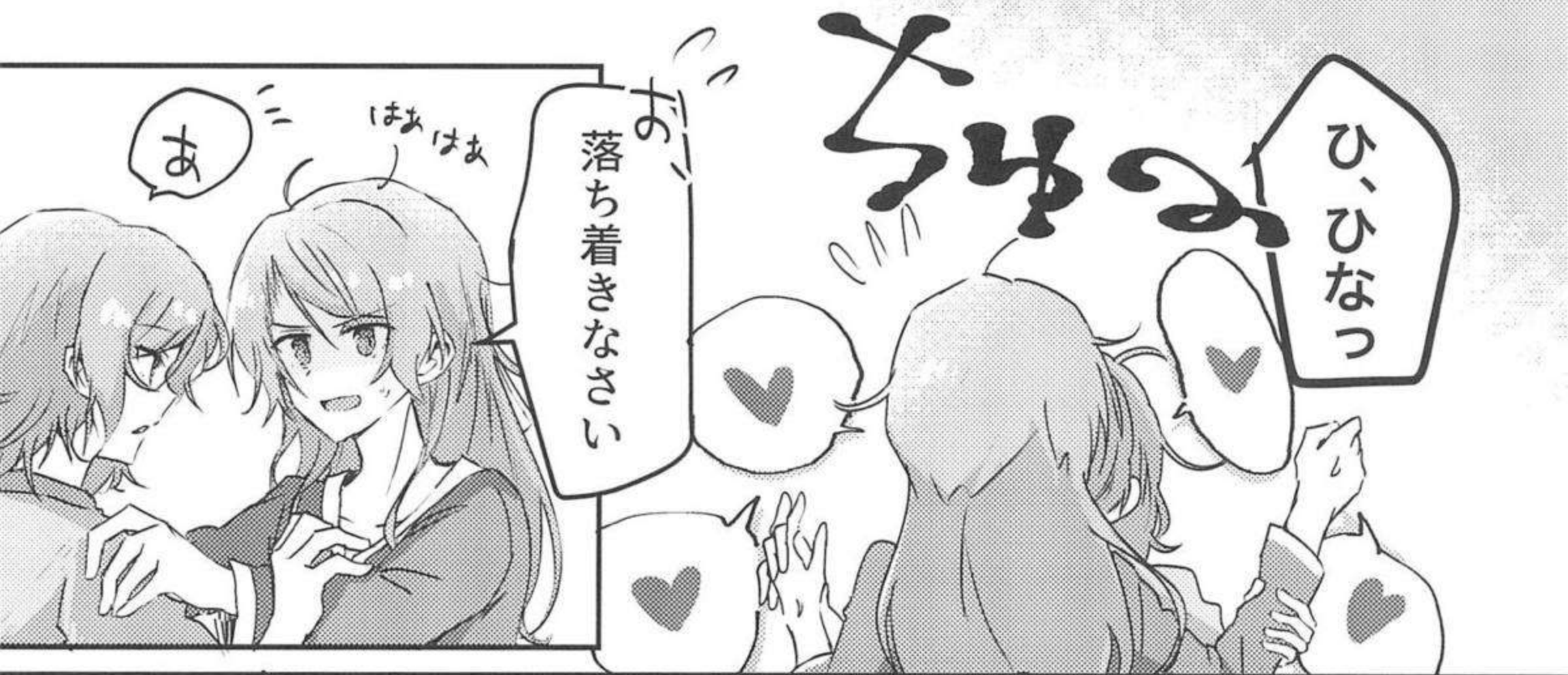
……まだ〜?



103



……







触ってみて
どう?!

濡れ、てる……
ぽあ……

グクグクッ

あれ？おねーちゃん
息が上がってない？

いいいっ

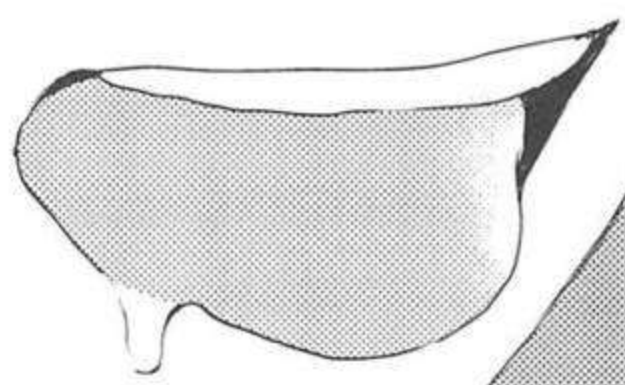
ほな

触られてないのに

興奮してるの？

ズンズン

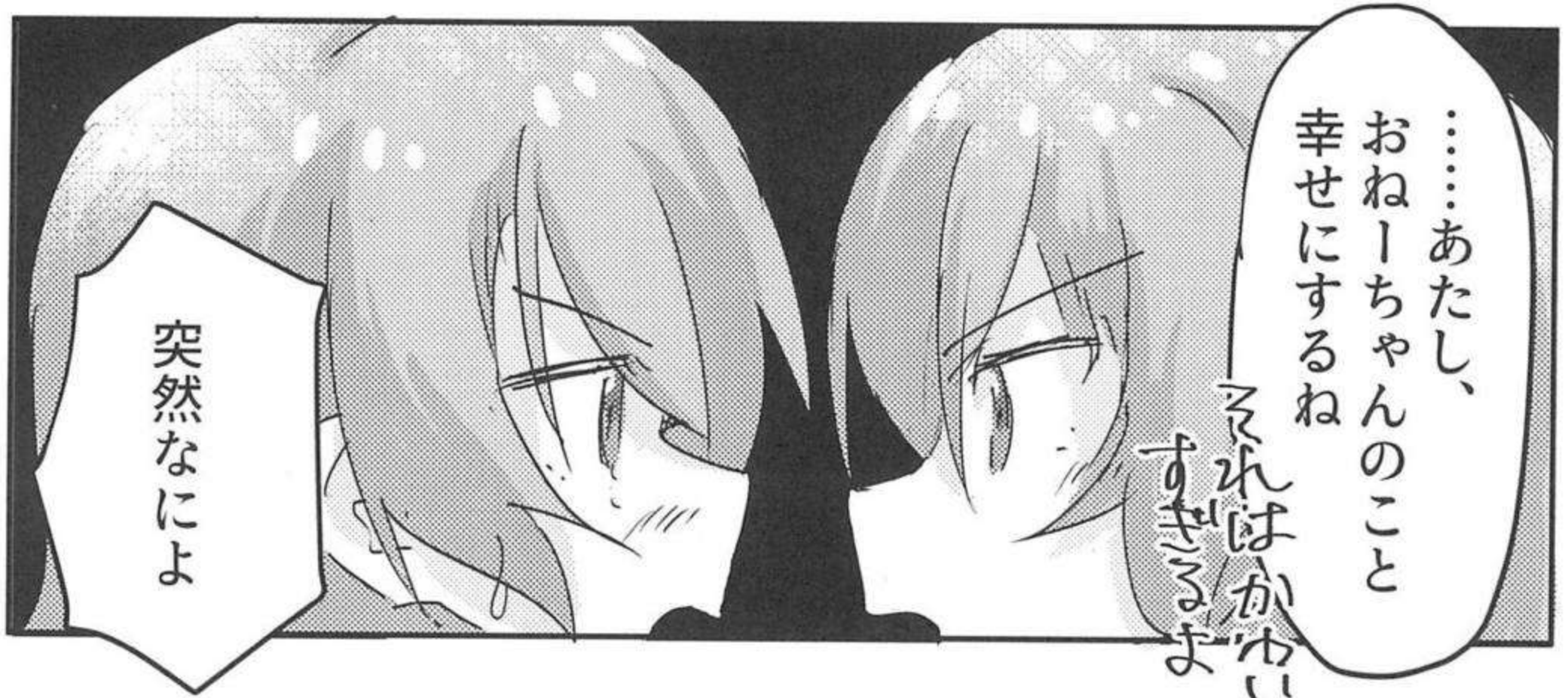
おねーちゃん





ちゅ





突然なによ

……あたし、
おねーちゃんのこと
幸せにするね

それはかわい
すぎるよ



私も、好き……よ



好きだよ。おねーちゃん

可愛



あは
すんなり
入っ
ちやった

こっ
す
ぐ
い
よ

ぐわ〜ん

あ
い
つ
も
よ
り
濡
れ
て
な
い
?

り
ん

し、知
ら
な
い
わ
よ……!

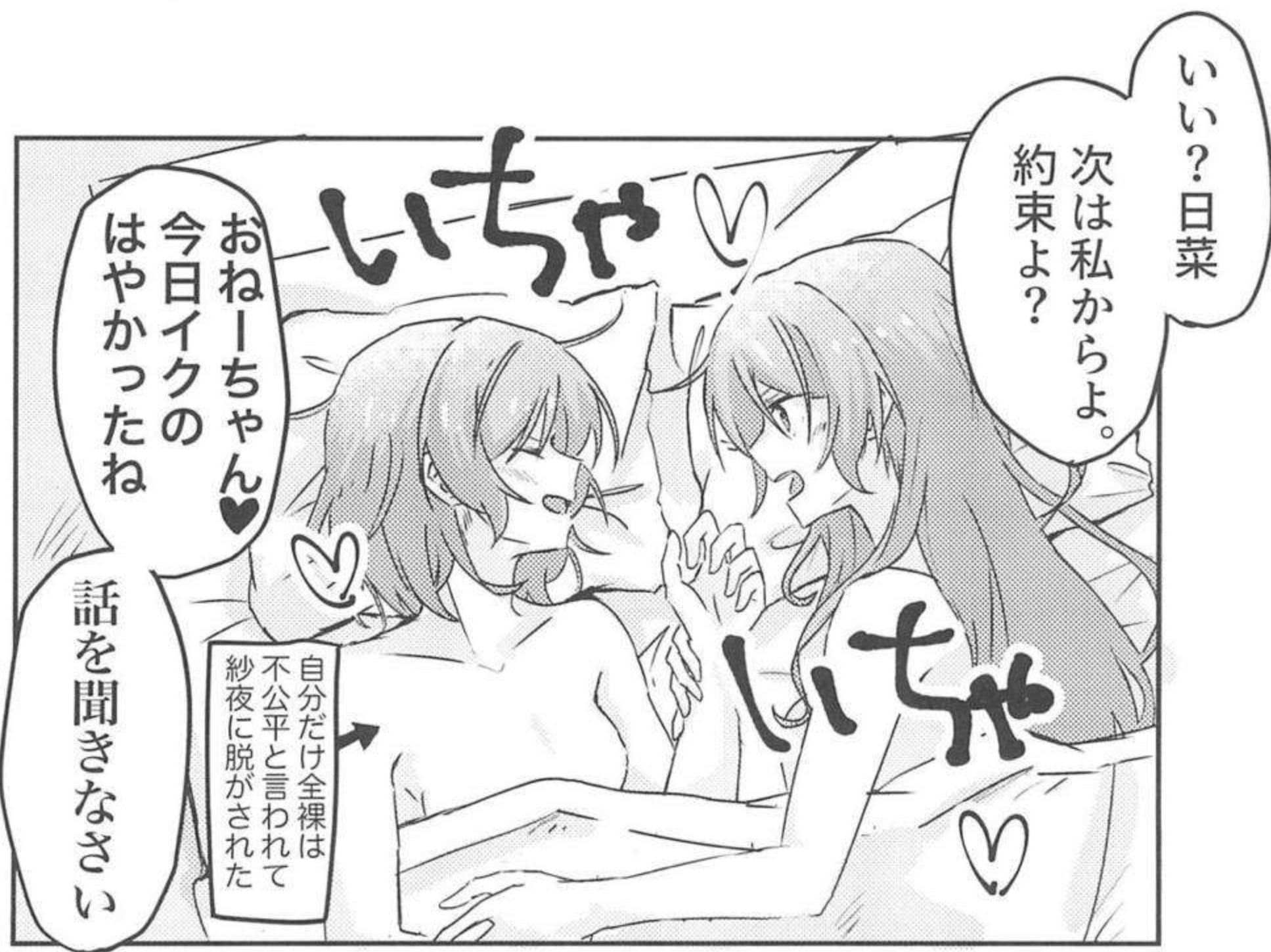


ね、も、も
う……!



ひ
な

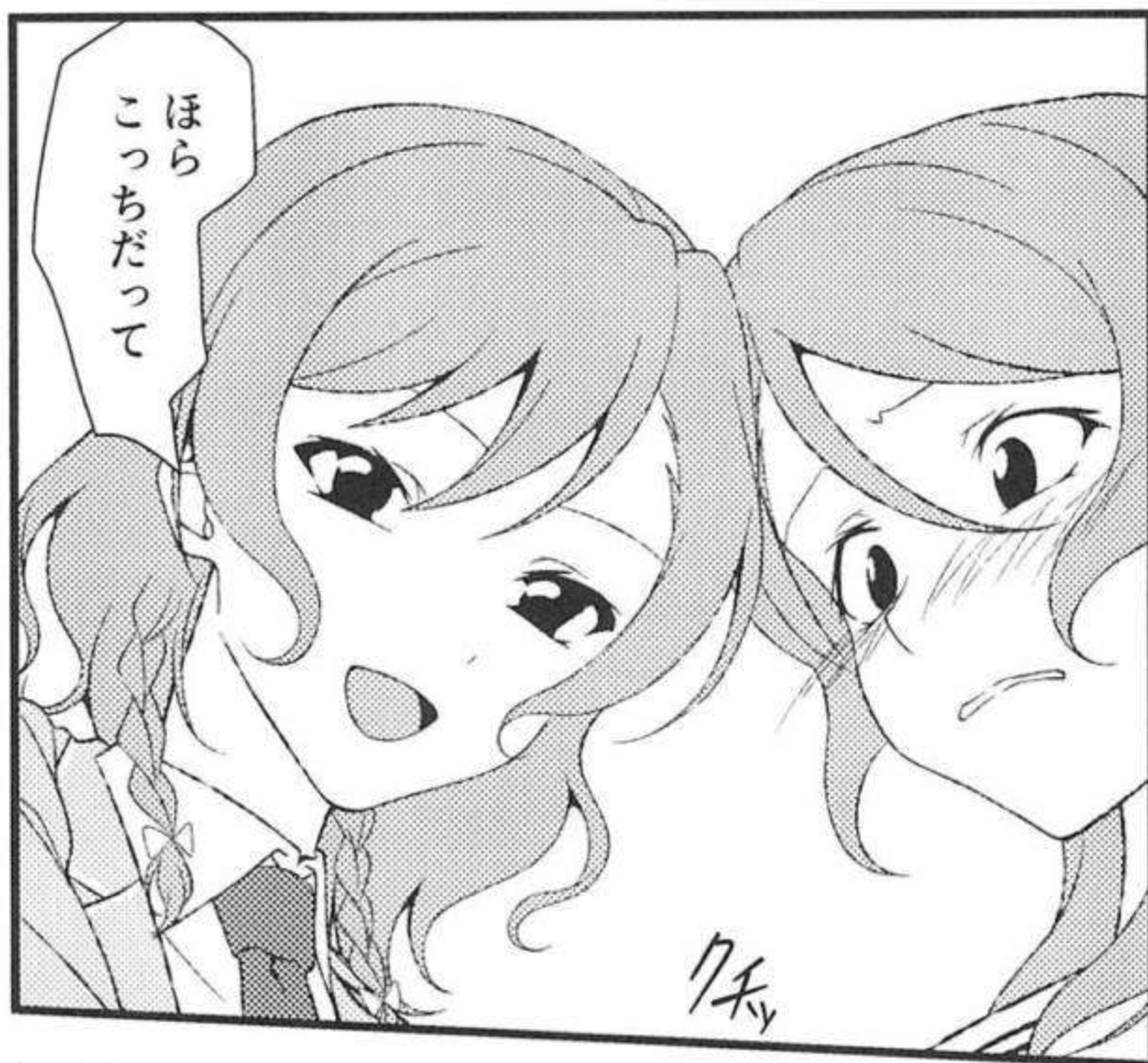
んー?



mototenn
twitter@08b06

好きなひなさよ体位
抱えどり(後背位)





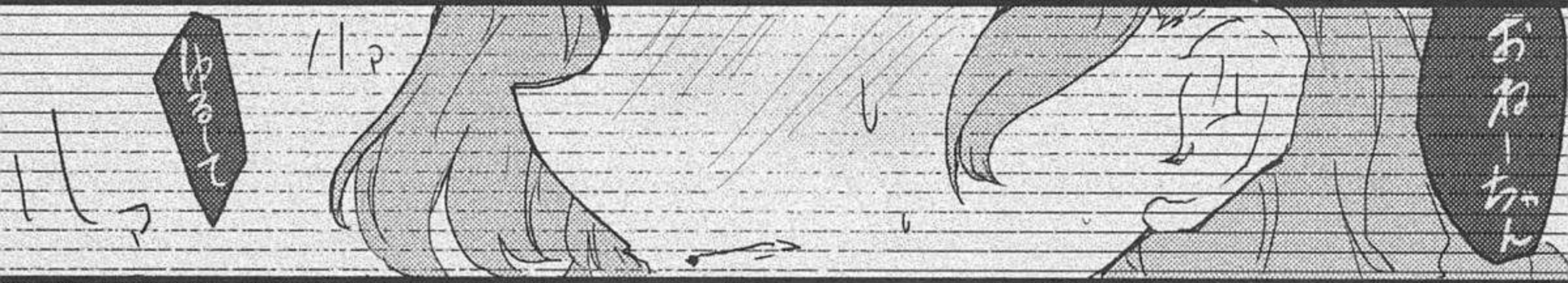






ズミクニ
twitter@zumikuni

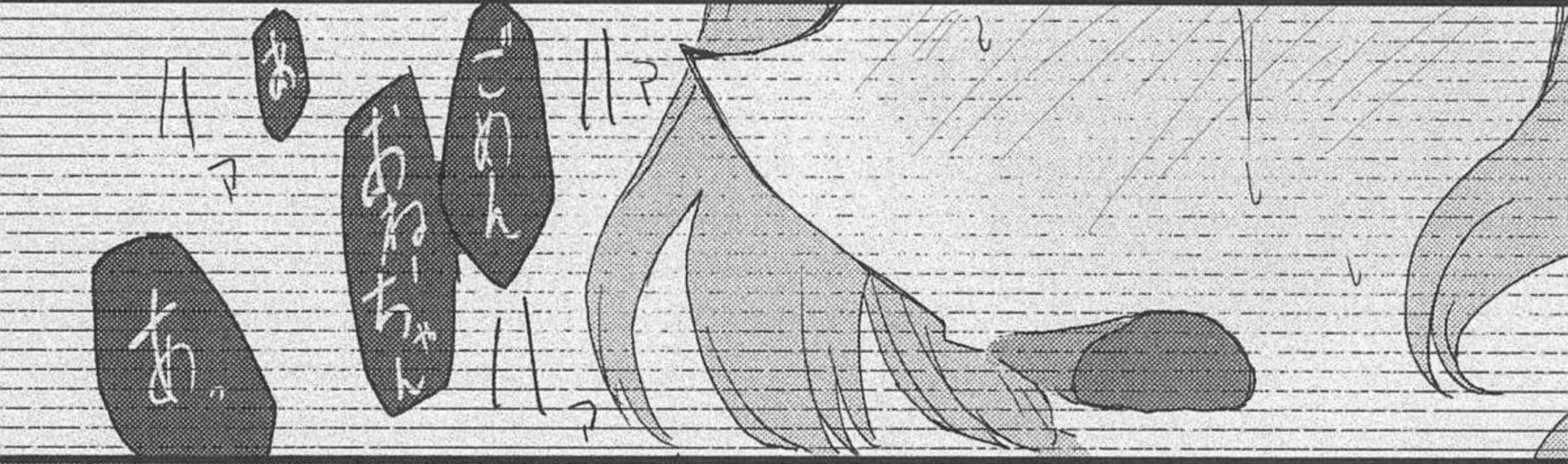
好きなひなさよ体位
正常位



おねーちゃん

ゆるして

||P



おねーちゃん

おねーちゃん

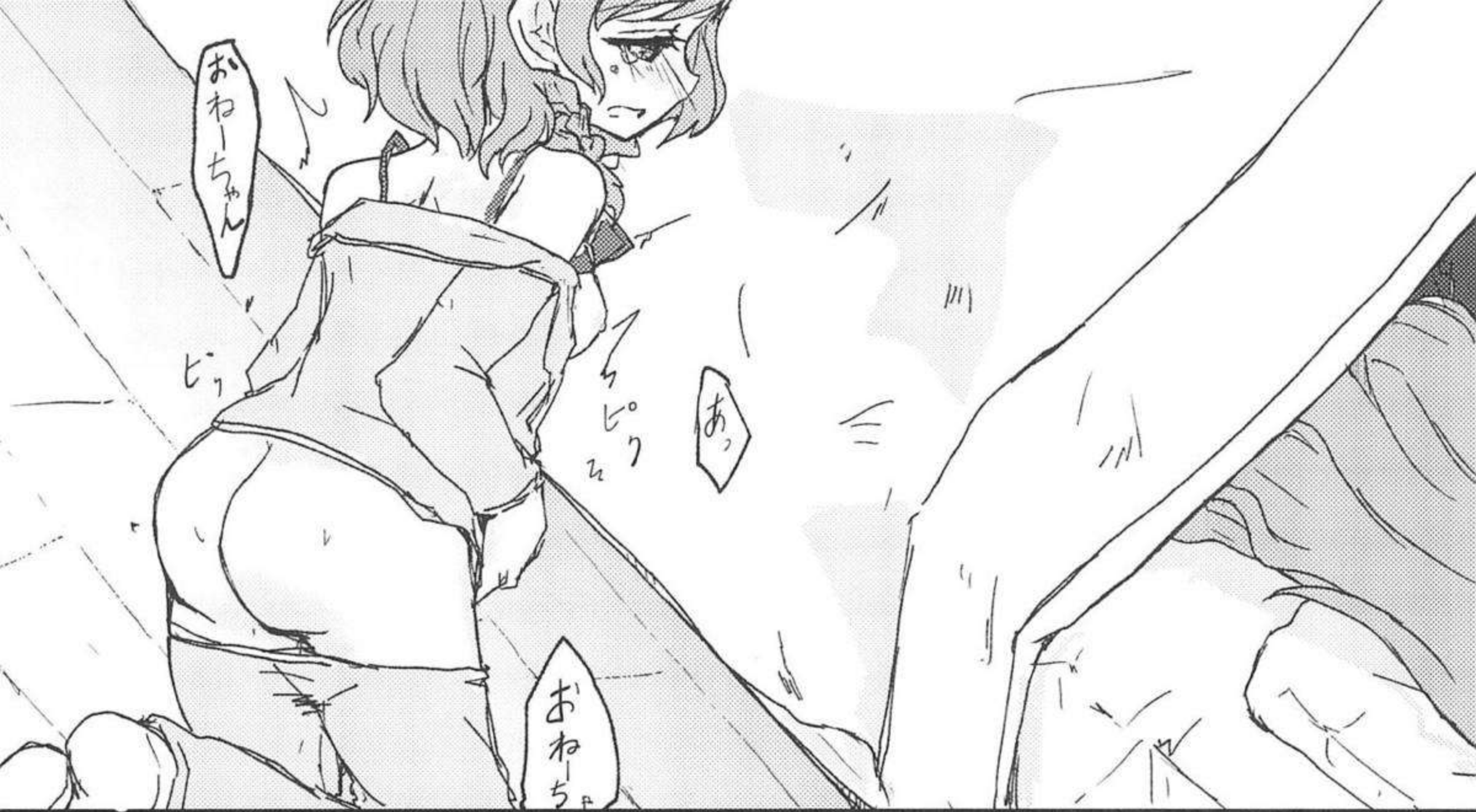
あ

あ

||P



ああ...



同罪

ズミクニ

またなのね
日菜



私が日菜と
疎遠になり始めてから
夜中にごうして自慰を
してくるようになった

おねーちゃん

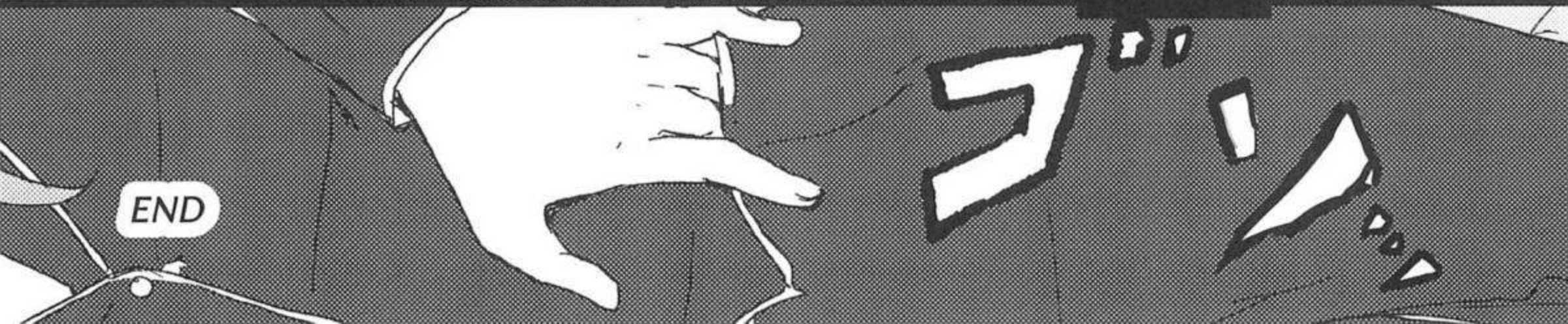


その声は普段の
飄々と私の全てを
超えていく姿とは
かけ離れたもので



酷く耳障りだから
早くやめさせる
べきなのに

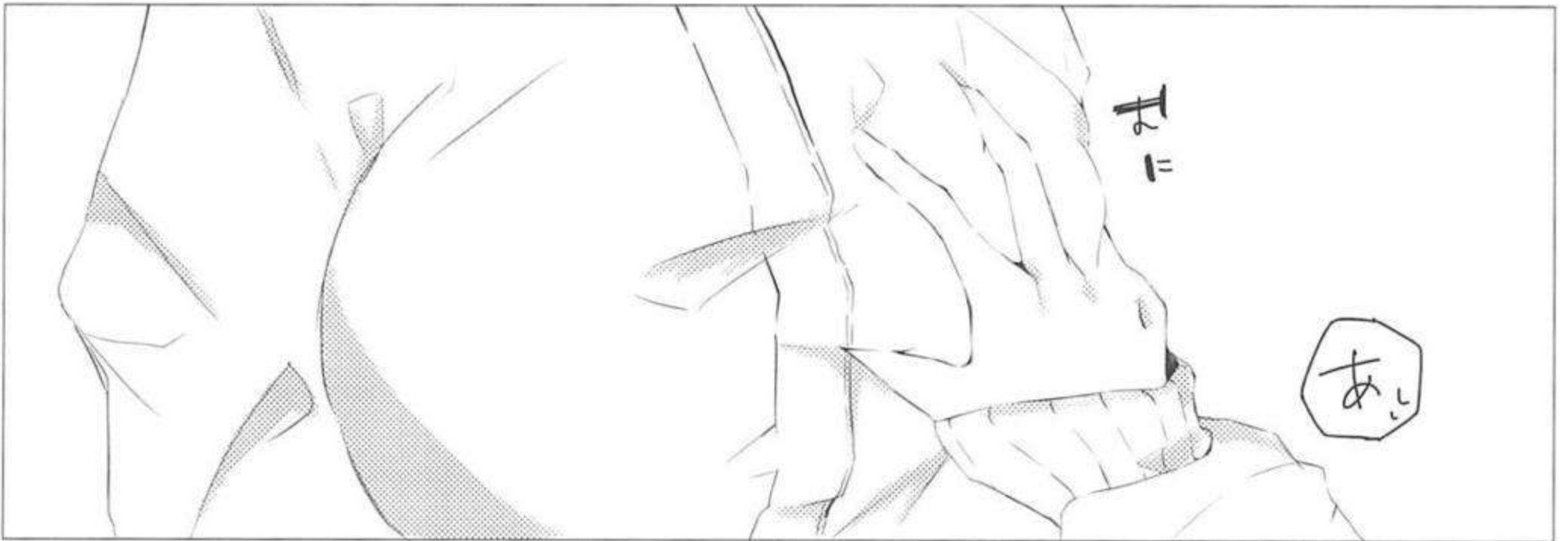
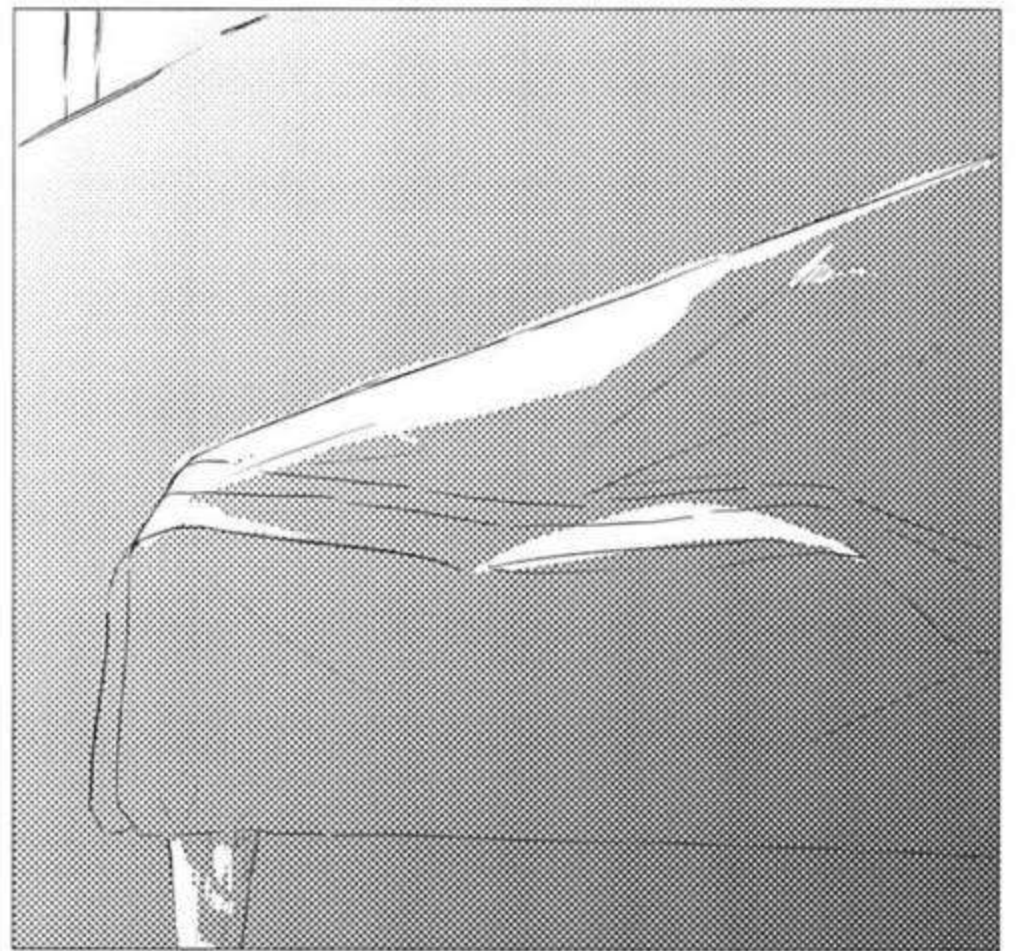
私は……



END

新浜やそ
twitter@yaso_0618

好きなひなさよ体位
日菜が上の69





おねーちゃんって
おっぱいすきなんだね

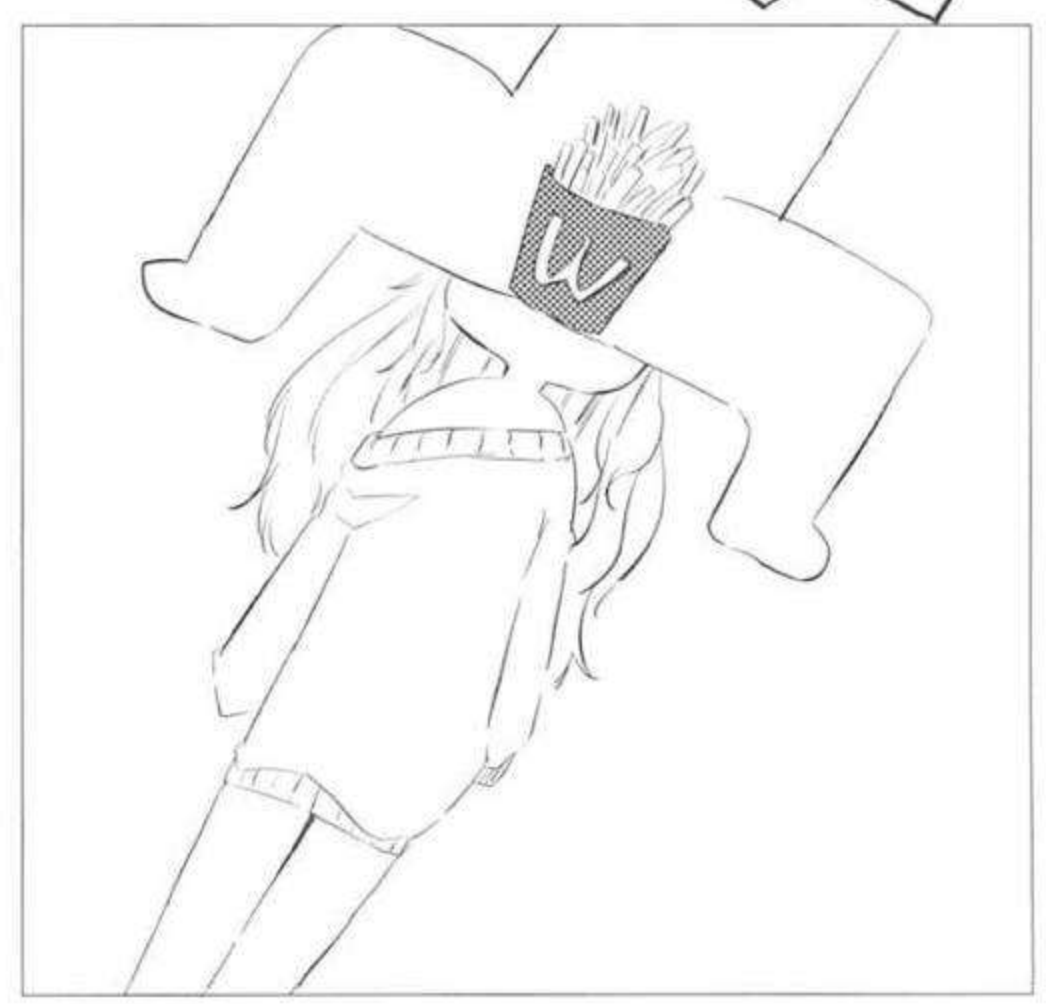
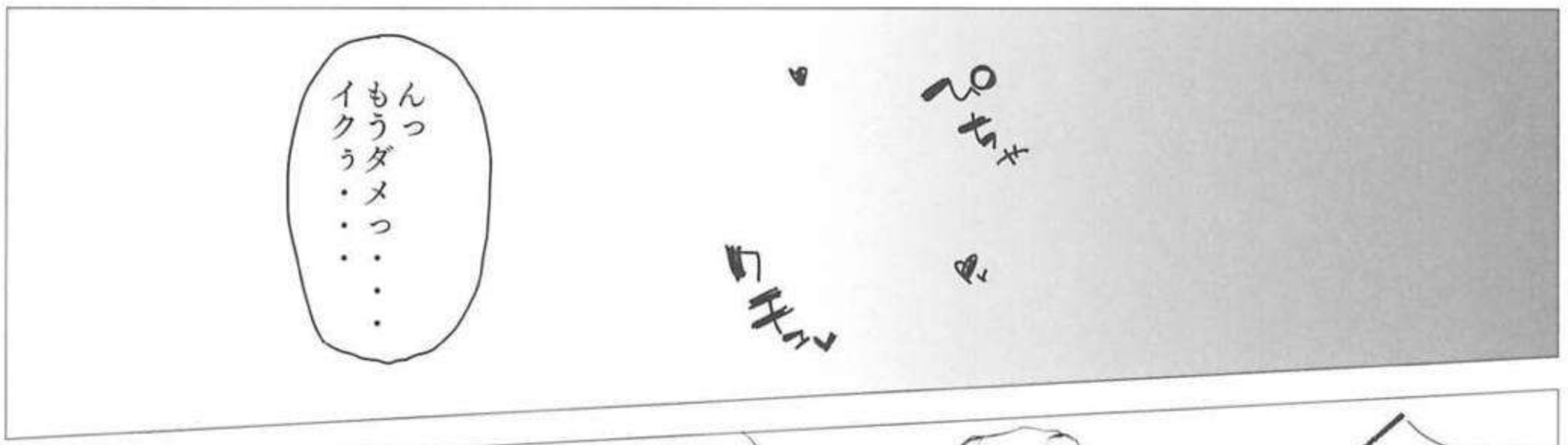


おっぱいも
いいけど



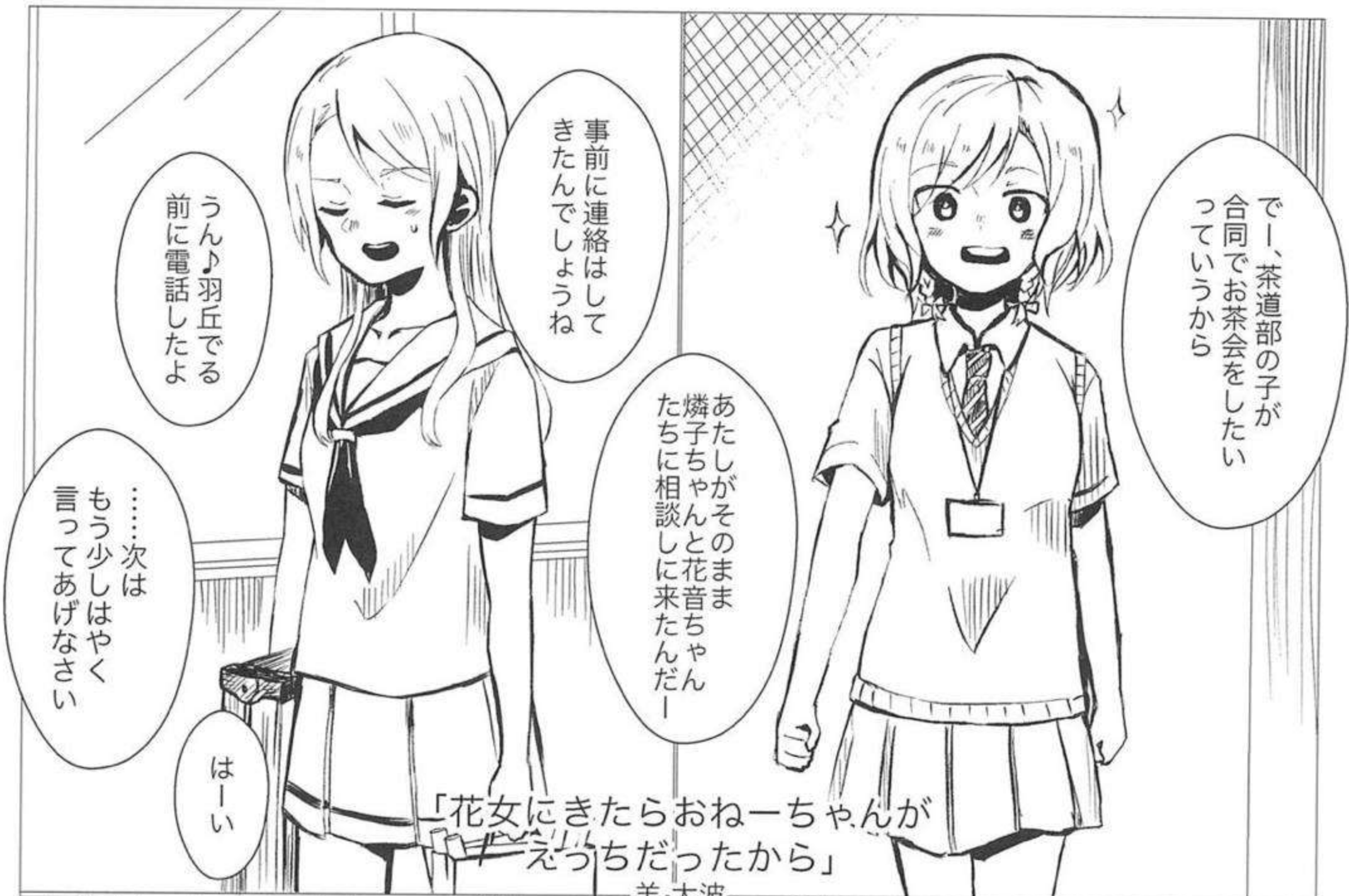
私こっちもさみしく
なっぺきちやっぺたなあ





羊 大波

好きなひなさよ体位
対面座位



でー、茶道部の子が
合同でお茶会をしたい
っていうから

事前に連絡はして
きたんでしょね

うん♪羽丘で
前に電話したよ

あたしがそのまま
燐子ちゃんと花音ちゃん
たちに相談しに来たんだー

……次は
もう少しはやく
言っただけなさい

はい

「花女にきたらおねーちゃんが
えっちだったから」

羊・大波



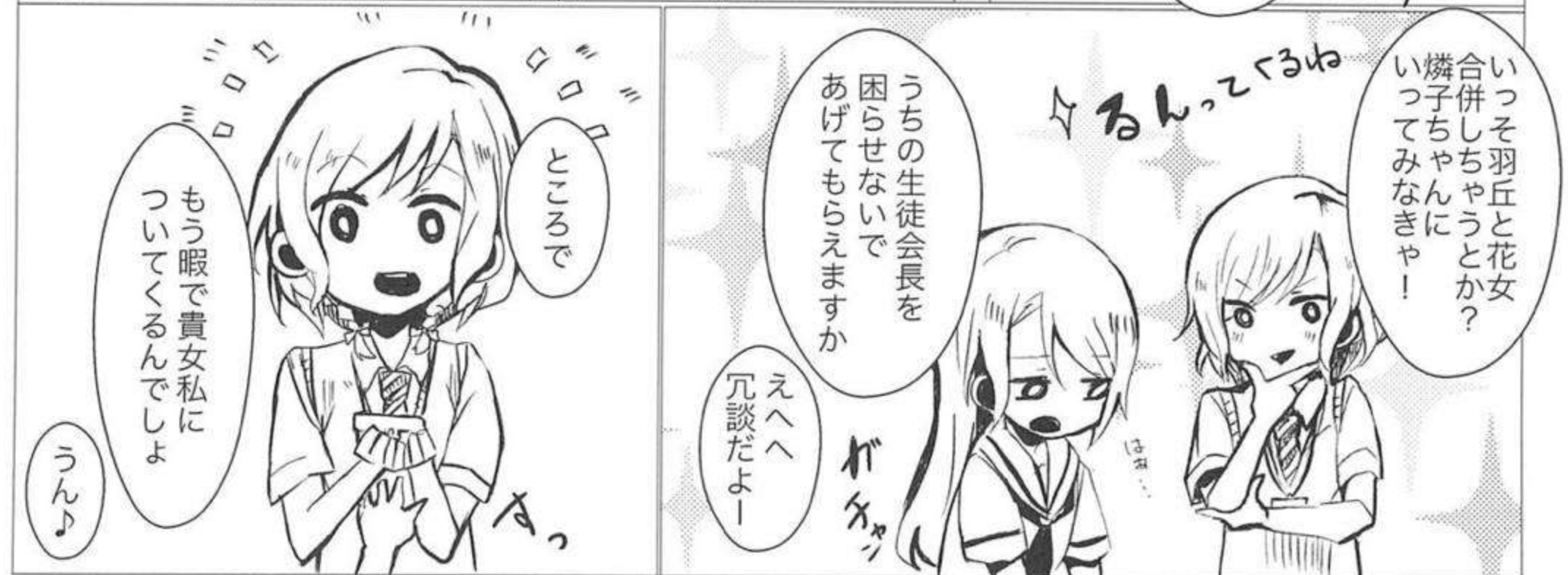
氷川先輩
日菜先輩

用は終わったんでしょ
羽丘に戻りなさいよ

おねーちゃんの
お仕事みてたいなーって

貴女は他校の生徒なのよ
アイドルだから以前に
入り浸りすぎてみんなが
貴女を覚えているもの

えへへ
おもしろいねー



いっそ羽丘と花女
合併しちゃうとか？
燐子ちゃんに
いつてみなきゃ！

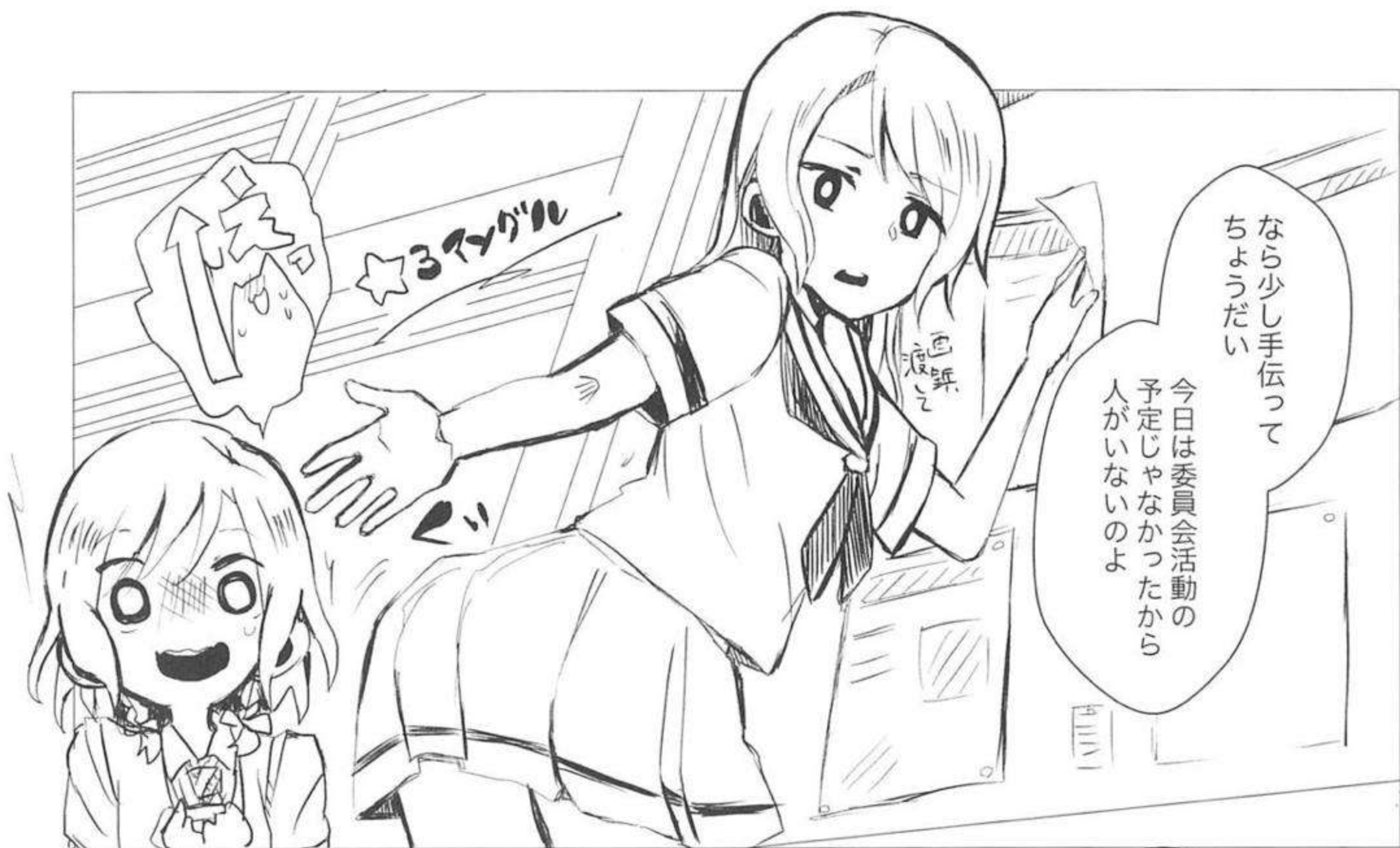
うちの生徒会長を
困らせないで
あげてもらえますか

えへへ
冗談だよー

もう暇で貴女私に
ついてくるんでしょ

ところで

うん♪



なら少し手伝って
ちようだい

今日は委員会活動の
予定じゃなかったから
人がいないのよ

☆3マツダ

いいからごっち!

はっ?ちよ、
なに、

ちよつ
おねーちゃんつ

ワタ
バタ
ガタ
ガタ



おねーちゃんさー...





正座。。。

嫌って言ったわよね私
しかもここ学校よ私の

で、なにか申し開きが
あるなら一応聞いてあげるわ



お、おねーちゃんでも
気持ち良さそうだったよ

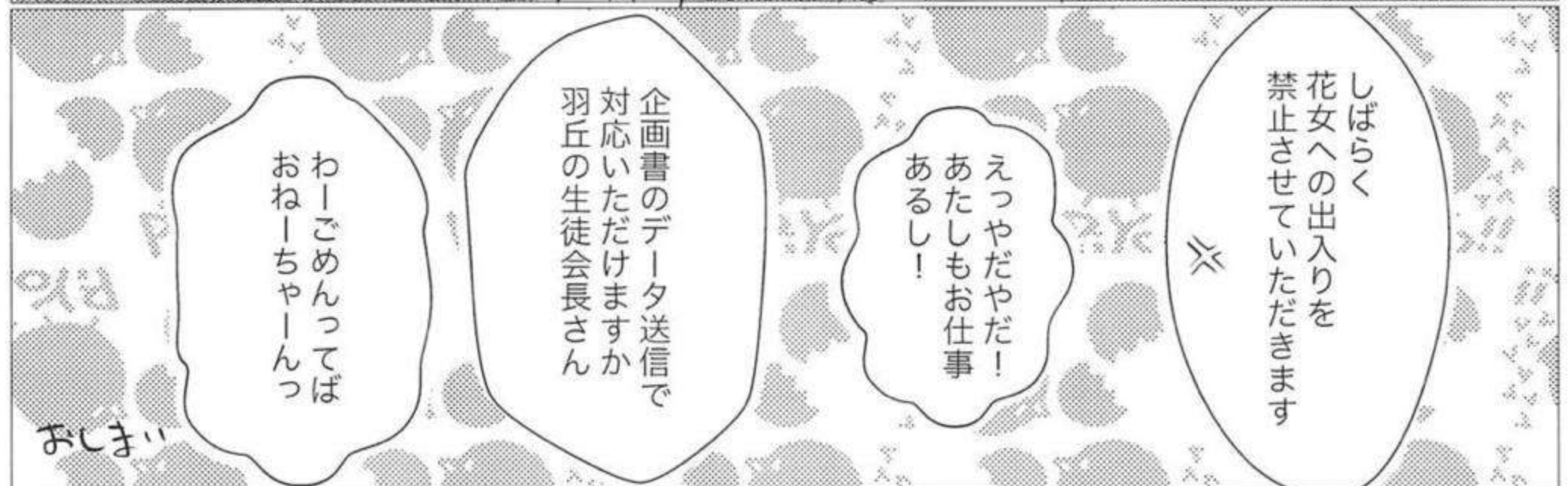
おねーちゃんちよつと
誰かにみつきりそうな
シチューエーション好き
なのかなーって

でもやっぱりあの
体勢でお仕事するの
やめた方がいいよー
だってえっちだもん
あたしそっこーで勃



へー…それが
貴女の申し開き
という訳ね…

あ、えっと
素直な
感想…みたいなの…？



しばらく
花女への出入りを
禁止させていただきます

えっやだやだ！
あたしもお仕事
あるし！

企画書のデータ送信で
対応いただけますか
羽丘の生徒会長さん

わーごめんってば
おねーちゃんっ

おしまい

久原
twitter@q_hara9

好きなひなさよ体位
片脚抱え正常位(45度)





じゃあ試してみようよ
おねーちゃん

ぐっ

ムムム



そもそも水の中に駅なんて
ないでしょう

ムム

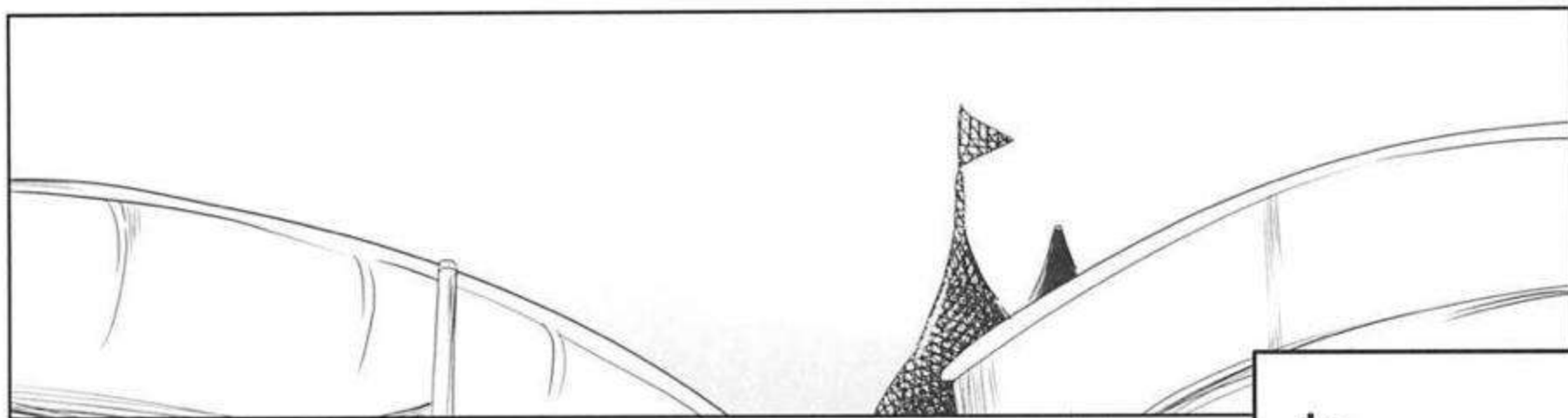


じゃあ
明日はトコナツツパークね!!

え？

トコナツツパークは
駅じゃないわよ

ムム



in
トコナツツパーク



ええ、
そうね…

なぜココに…

ゼン
ゼン



いんー!!
いい天気だね〜♪



んん

んん



あッ

んん

あついで…のにつ
冷た…ツ!!

んん

んん



んん

もー

んん

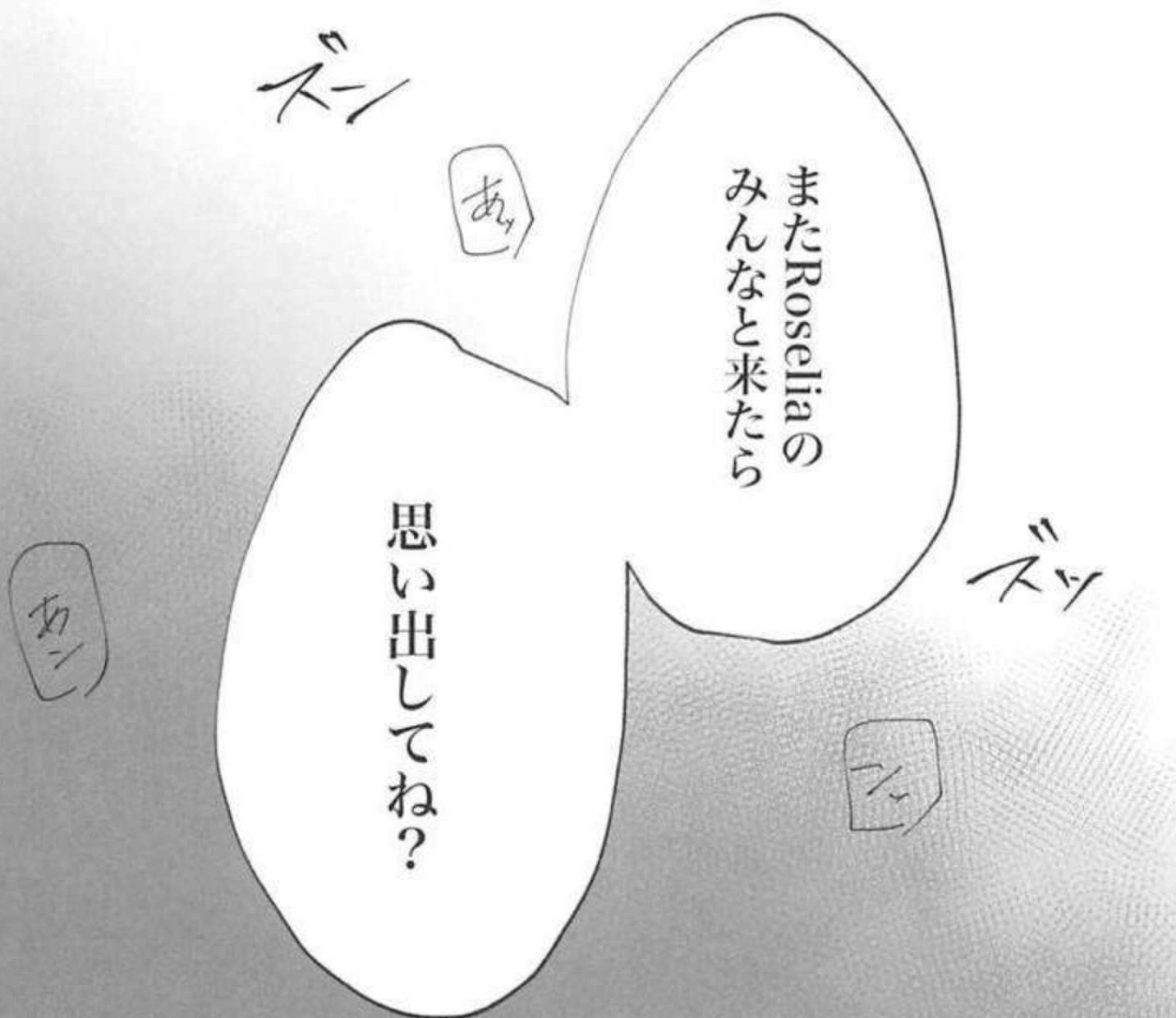
あおるの
上手なんだから

んん

んん



んん





後日...

知らない言葉は
徹底的に調べるようになった



ささぎ

twitter@sasagin_v

好きなひなさよ体位
正常位

おねーちゃん！

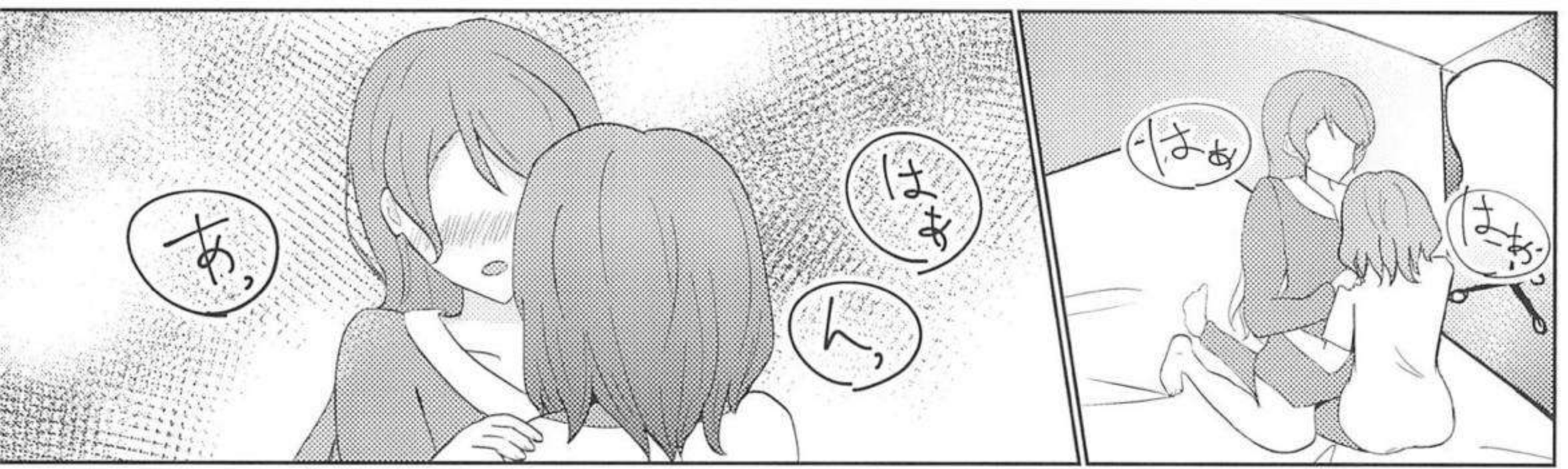
モフモフ
ワンワンが寝る！

あとで
おねーちゃんのお部屋
行くね？

ビクッ
ボクッ

ニク
ニク

キク



最初こそ、手を繋いだり
いっしょにおでかけしたりしたい
というものだったのだけれど……

私は日菜の為になること、
日菜のしたいことを
させてあげたかっただけ
だった。

いつからだったか知ら
ず日菜とこういうことを
するようになったのは





んっ

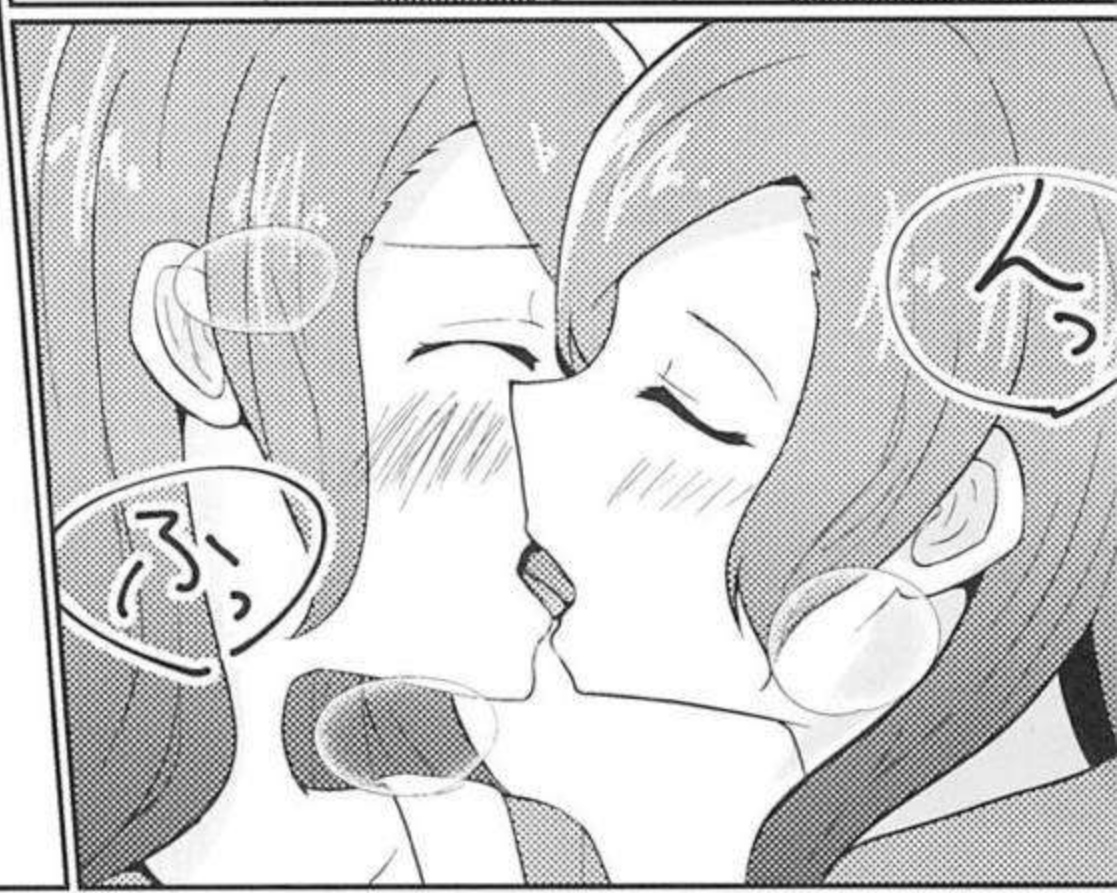
ちゅっ



おめ

はあ

はあ



んっ

んっ



おねーちゃん
ちゅー、したい……
ダメ……？

日菜の要求は
日に日にエスカレート
していった

おねーちゃん
さわってもいい？

今となっては……

おねーちゃん
脱がすね……？

おねーちゃんのパジャマ
かわいいんだけど
えっちするには不便だね

そんなこと想定されていないの
だから当たり前でしょう

じゃあ脱がしちやお!

スル
スル

ちょ、ちよっと
自分で脱ぐから……

……

んっ

んあっ……

はっ……
んっ……んあっ

はあ

はあ

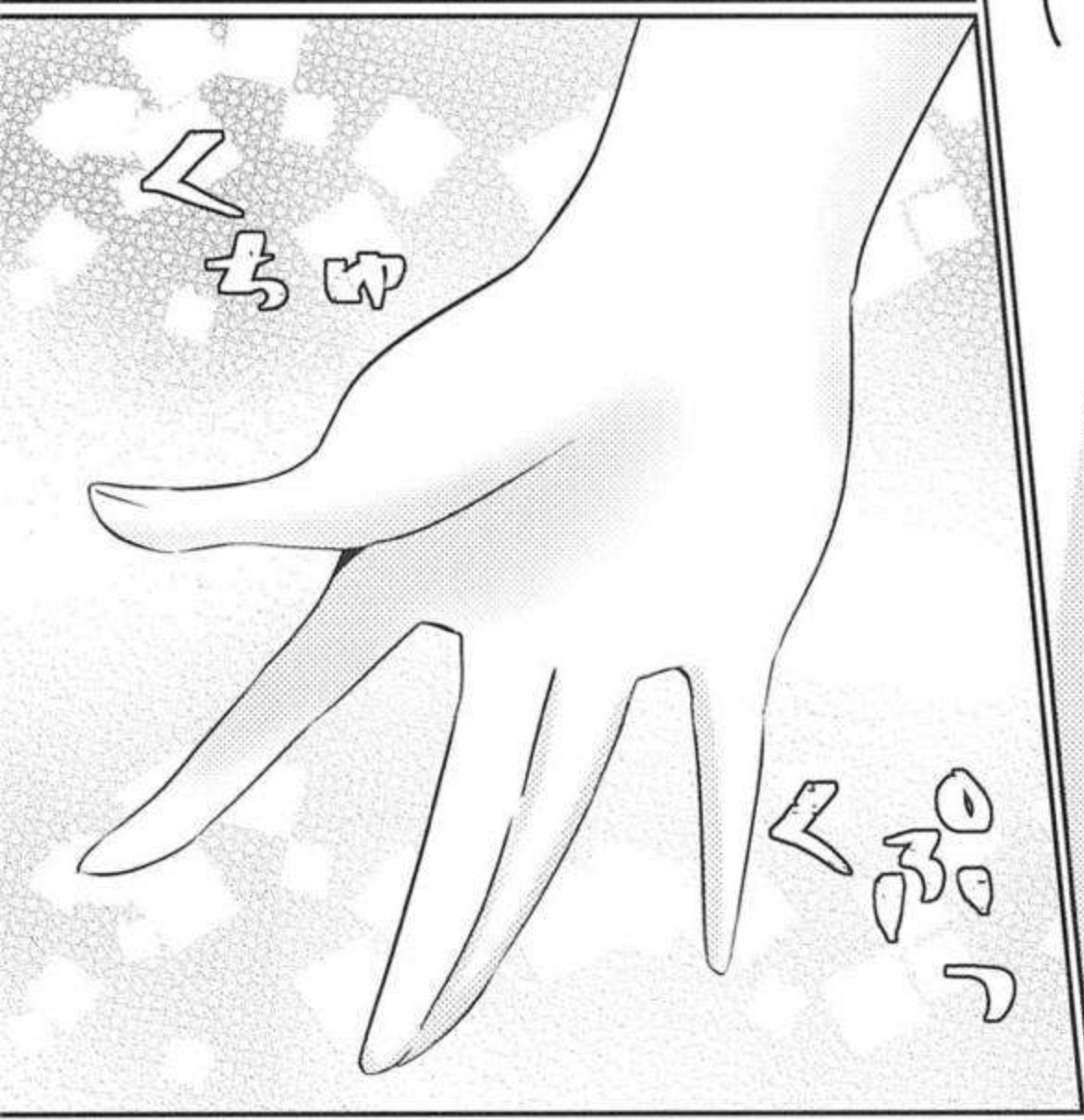
ちゅっ♡

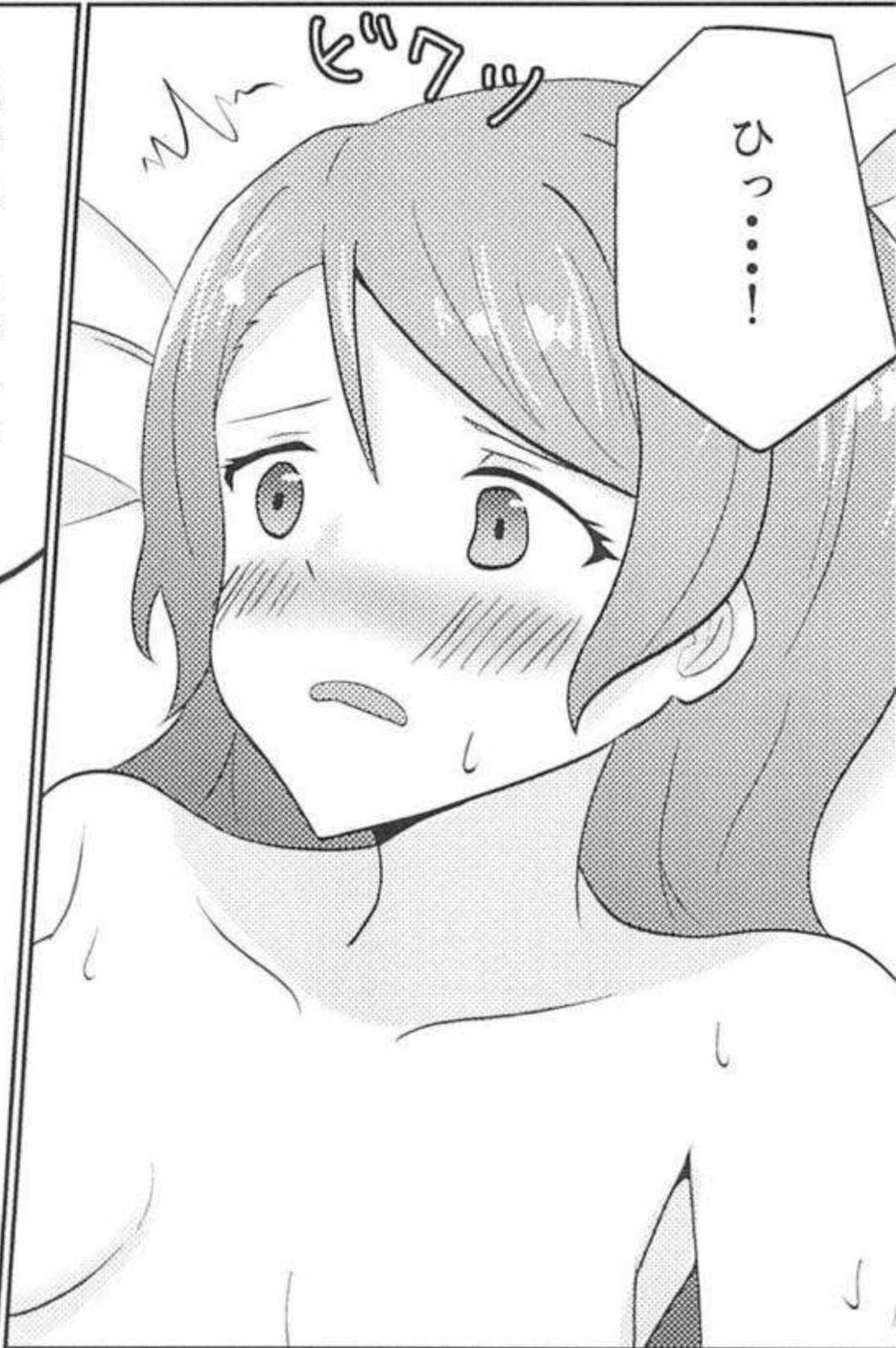
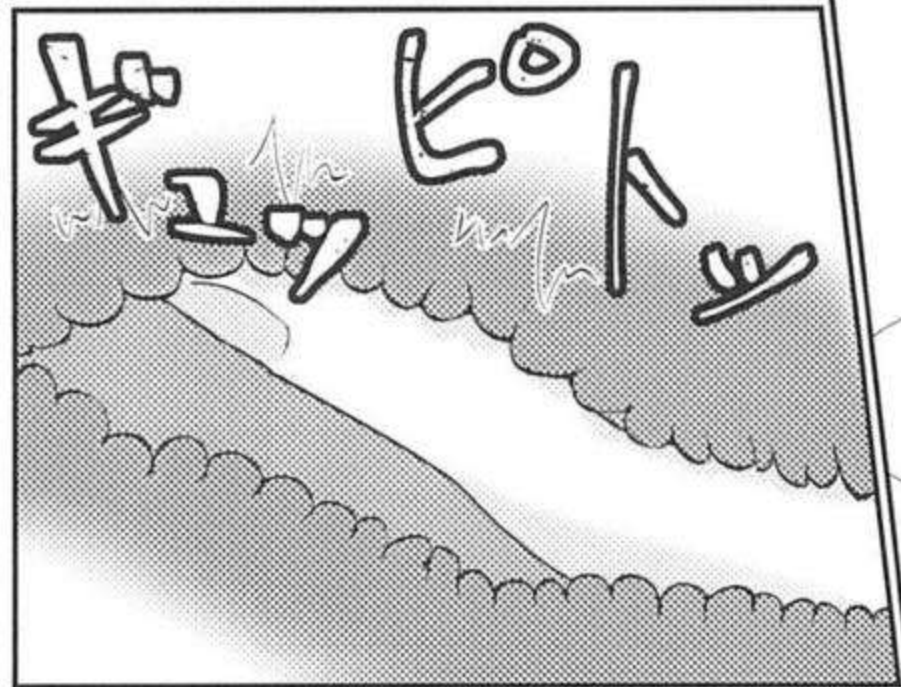
ちゅ

はあ

ちゅ









ね、ねえひな
まって、
そこ、なんか
へん……っ！

そういえば
まだイッたこと
ないよね

変じゃないよ
そのまま
気持ちよくなる？

あっ

アッ



ふっ、
んっ……

うっ……

アッ



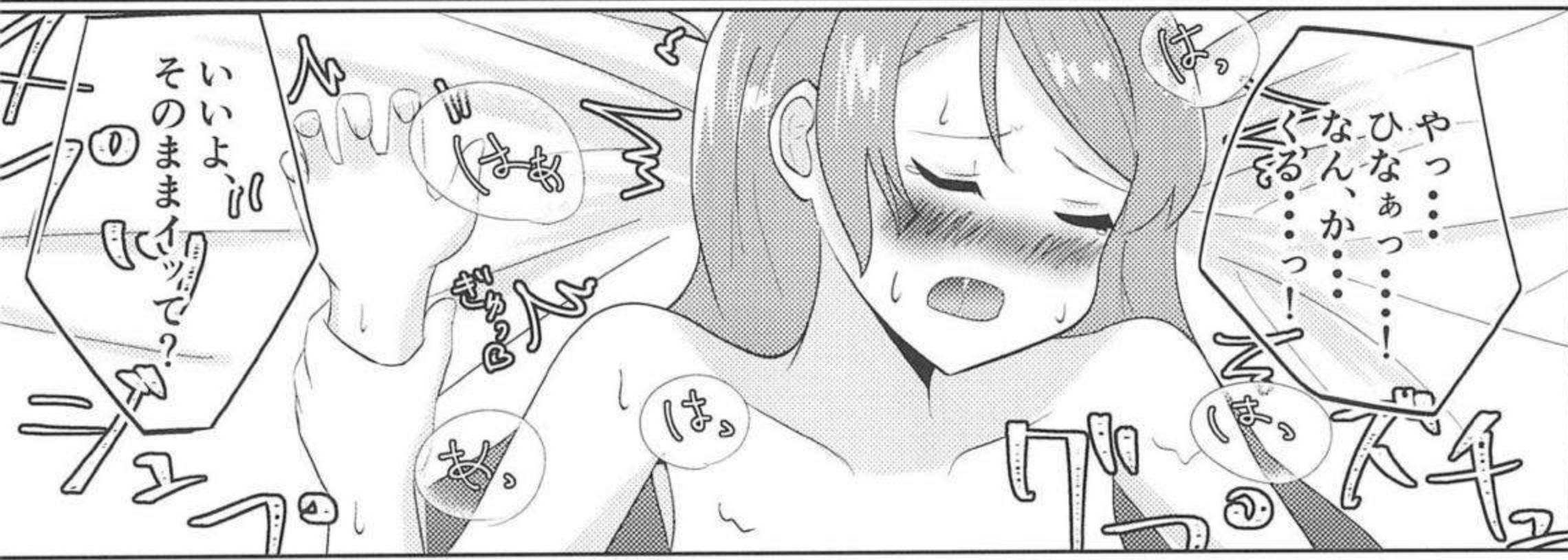
も？
おねーちゃん
顔隠さないでよー

やあっ……
あっ……！

はっ

はっ

はっ



やっ……
ひなあっ……！
なん、か……
……っ！

いいよ
そのままイッて？

はっ

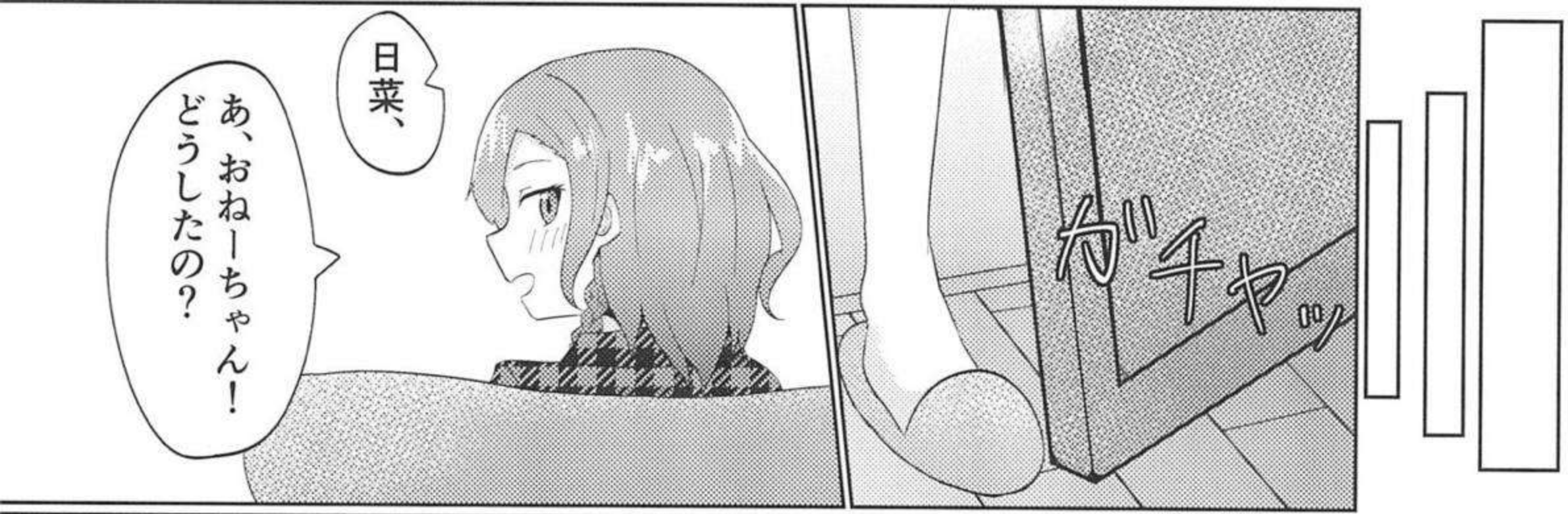
あっ

はっ

はっ

はっ





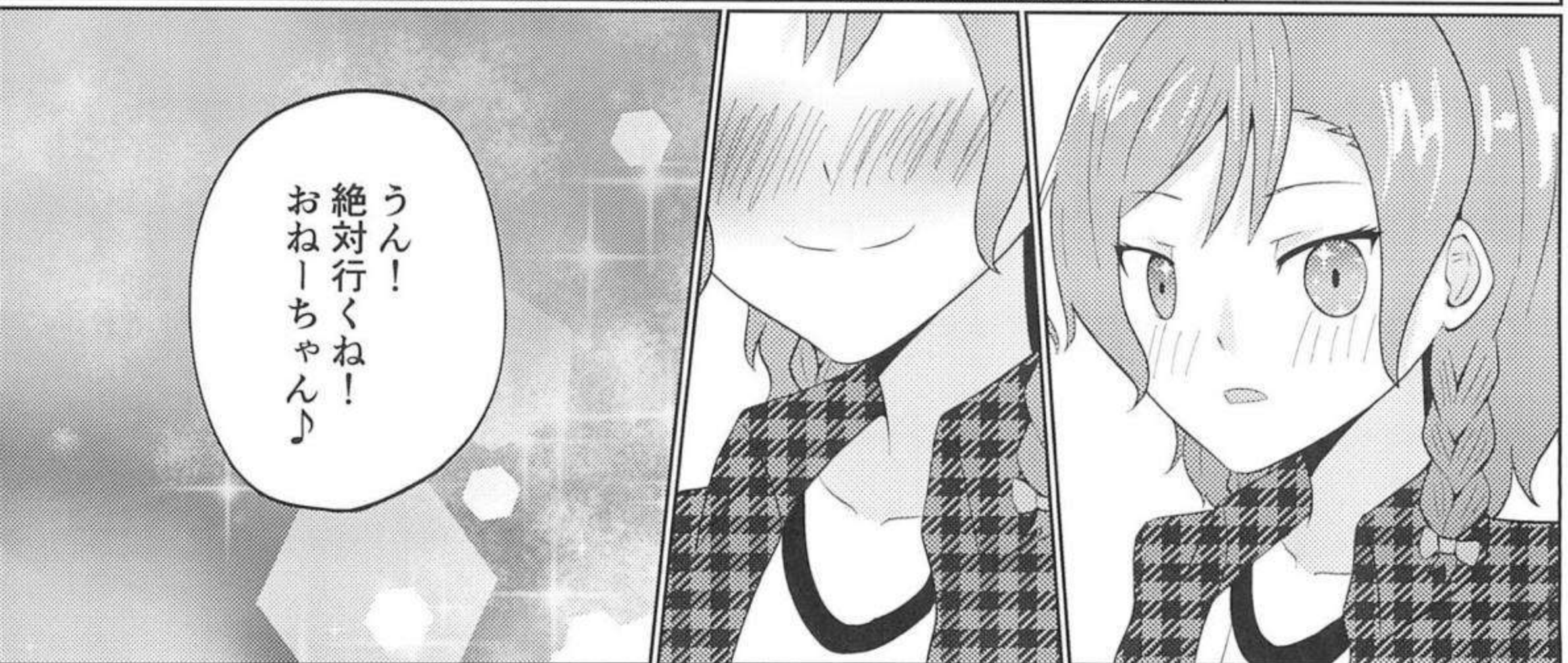
日菜、

あ、おねーちゃん！
どうしたの？



今夜私の部屋、

来てもいいから……



うん！
絶対行くね！
おねーちゃん♪

しまえび
twitter@HbmyKonb

好きなひなさよ体位
立ちバック

前回のあらすじ

おねーちゃん…

日菜…

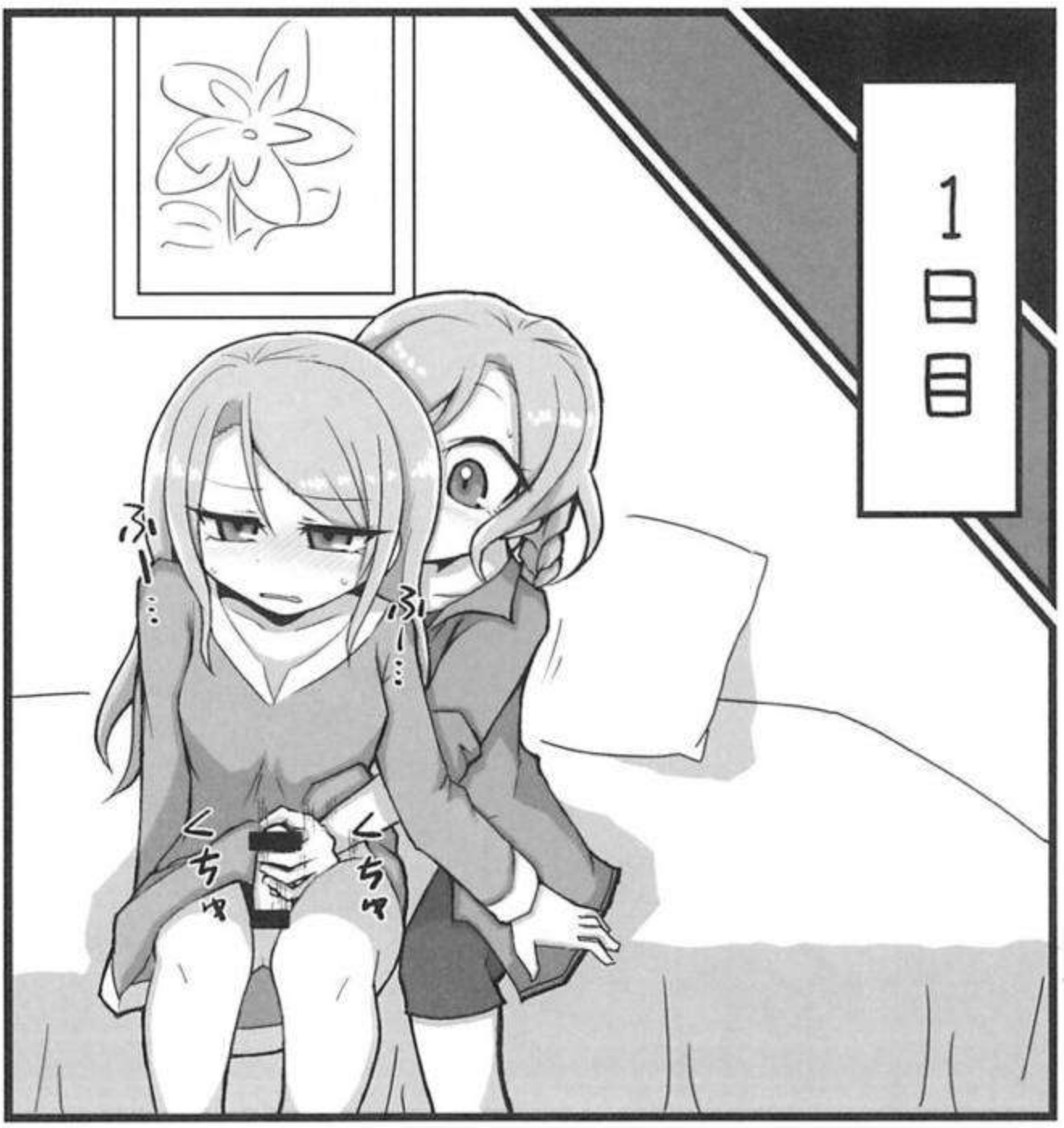
ある日、
おねーちゃんに男の人の
それがついていた。

お医者さんが言うには、
外からの刺激でそれを
使っていくことで

症状は少しずつ
改善していくらしい

その役目はあたしが
自分から申し出た。

あたしが
おねーちゃんのが
力になれることが
素直に嬉しかった。



だ、大丈夫？
痛くない？

んっ……！

だっ……びびり……



ありがとう、日菜……
辛い思いをさせて
ごめんなさい……



……おねーちゃんの
力になれてあたしは
嬉しいよ、気にしないで？



4
日
目

ねえねえ、

どお?
気持ちいい?
おねーちゃん。

おくち
あけて?

ふーん

7
日
目

あー

10
日
目



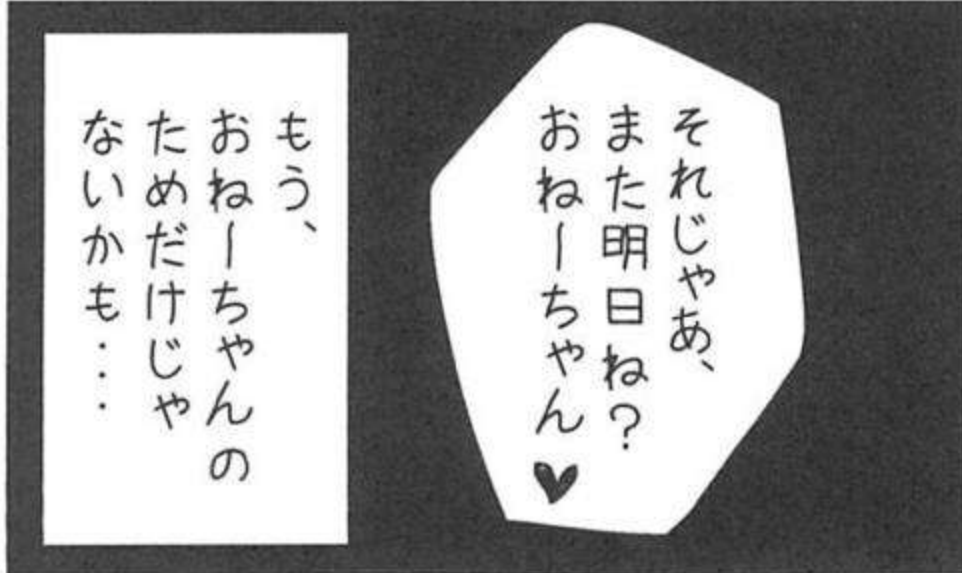
ごめんね
おねーちゃん...



んんんんん

んっ、日菜っ、
もうっ...!!

ひゅるるっ



それじゃあ、
また明日ね?
おねーちゃん♡

もう、
おねーちゃんの
ためだけじゃ
ないかも...

当麻
twitter

@tomatooooo027

好きなひなさよ体位
正常位



私は日菜との
セックスが
あまり好きでは
ない。

おねーちゃん



※甘い

!!わーい

…一回だけよ







かはっ

肉体的に、だ。



ごめ…



初めてシた時も
そうだった
苦しいから
やめて、と
言ったら



—あ

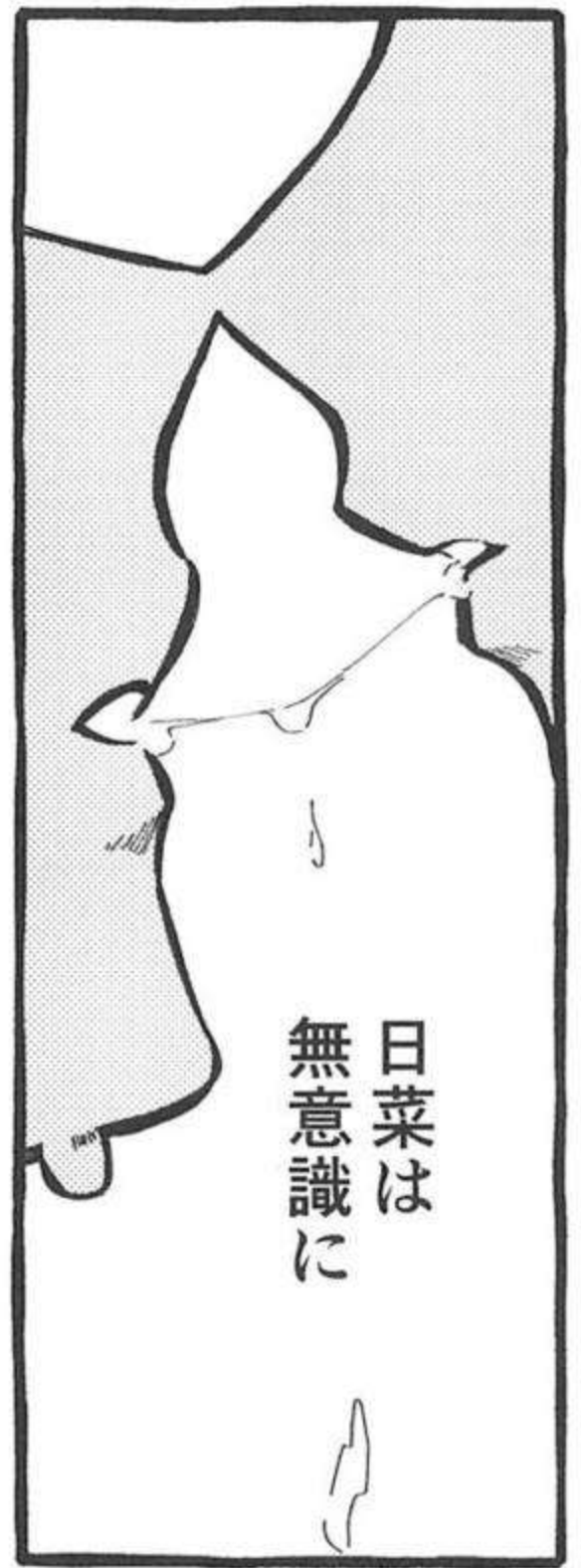


結局、
日菜のこの行為は
治らなかつた。

…首を
締められる度
いつも思う



私と
2人で一緒に
死にたいって
考えている
のではないかと



日菜は
無意識に



私には
目指すものが
あるの。



?
おねーちゃ



いたい...
な、
なんで...

日菜





今、
日菜と

一緒に
死ぬことは
できないわ



知ってるよ
そんなの：



…今は、
よ。



先の事なんて
わたしには
わからないわ

もし、その時が
きたら…



うう…
おねーちゃん
ズルい…

そんな事より
もう眠いの
だけれど

AM 1:30
そんな事って?!

~ Happy End ~

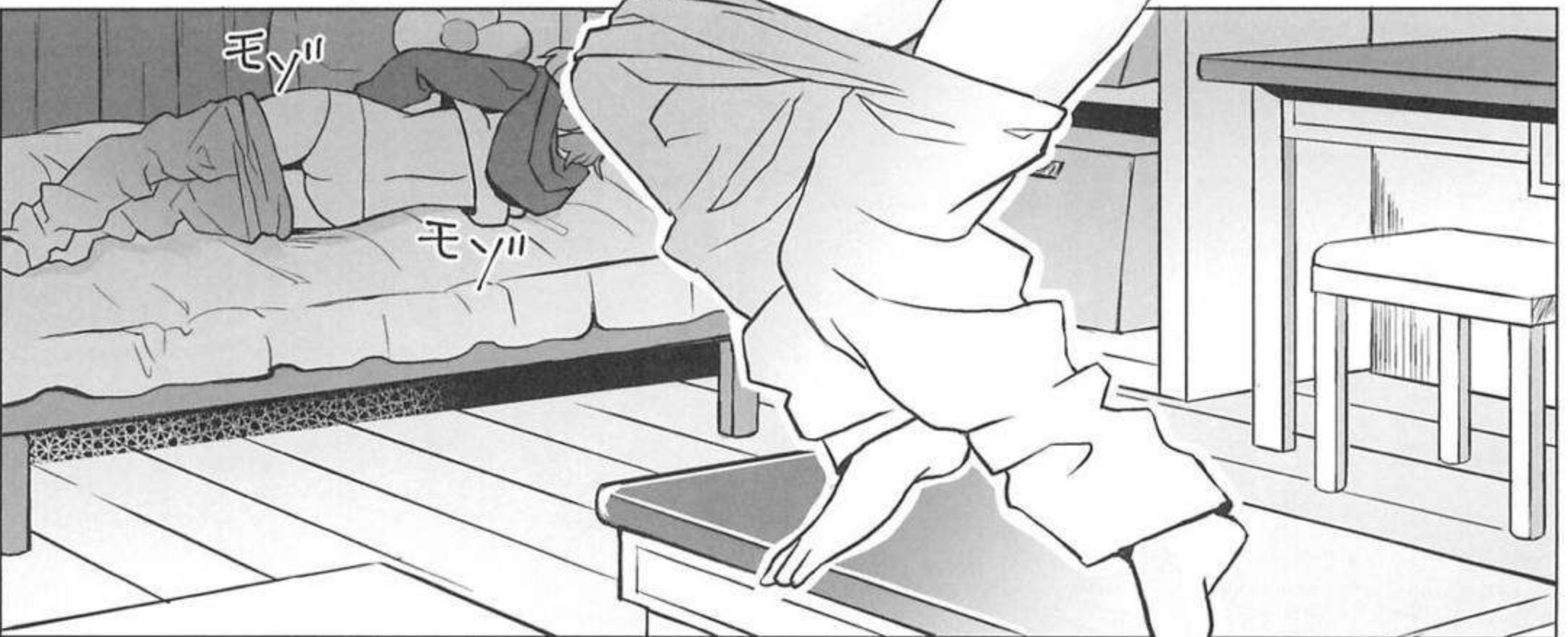
モケット
twitter@moquette9

好きなひなさよ体位
種付プレス&
だいしゆきホールド

ねえ、
一人えっちって
した事ある？

stand alone

モケット







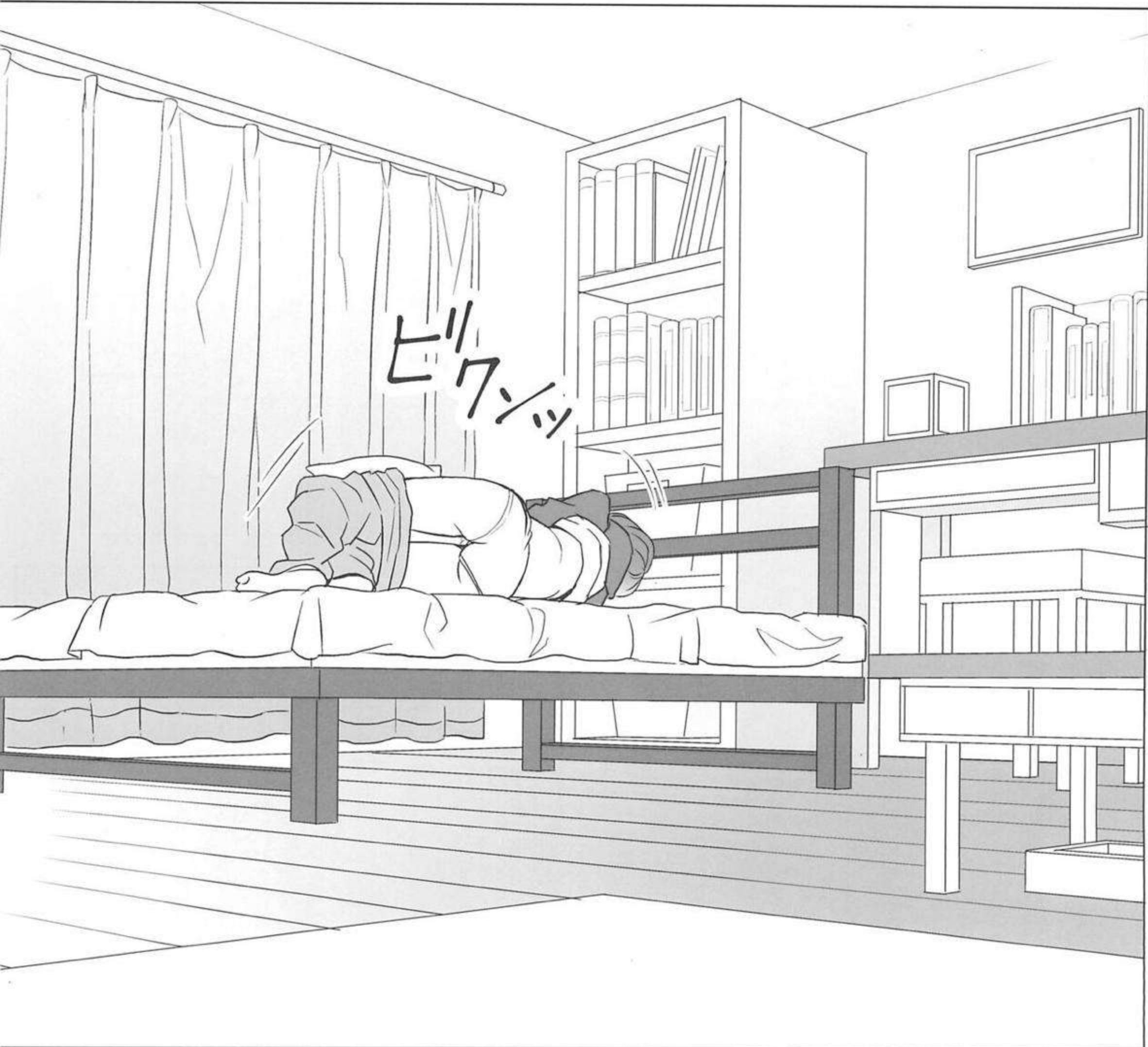
後ろめたく
ないの？

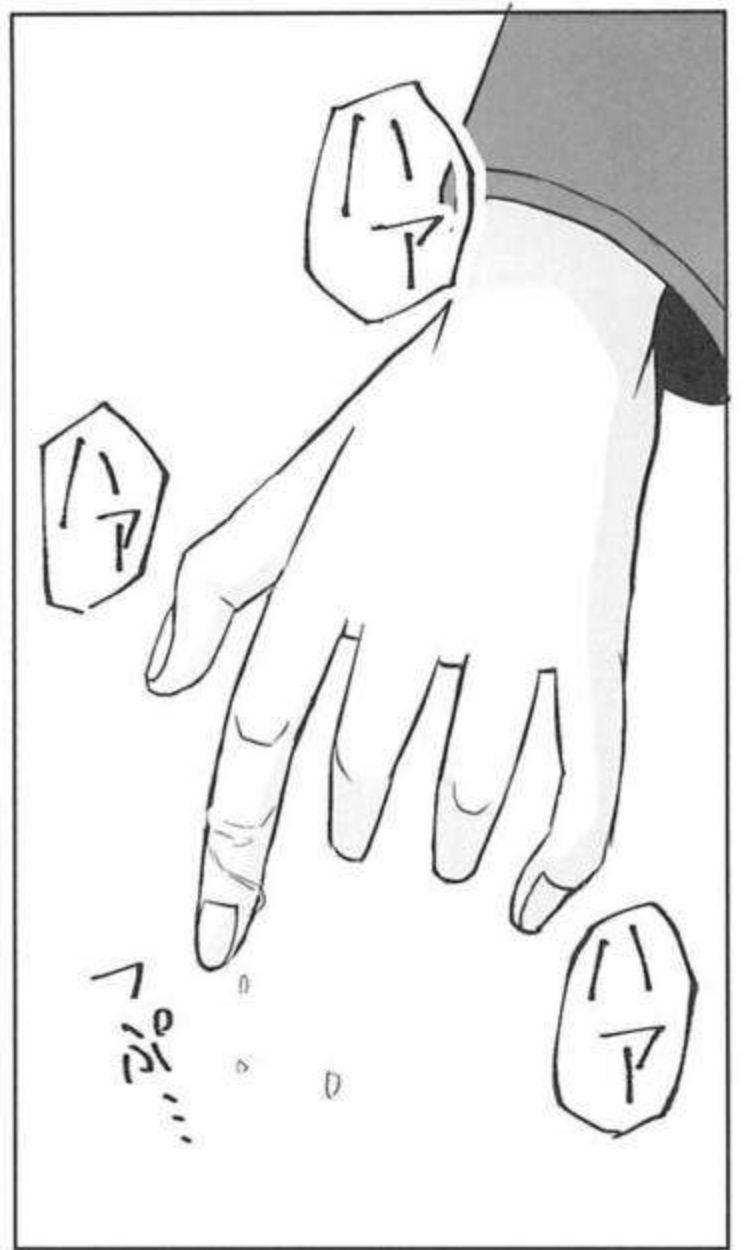
あー
まあ…













ただいま

フイッ



うん



おかえり
なさい!

倉

twitter@1stfooom

好きなひなさよ体位
騎乗位

dait (小説)
twitter@dait1210

好きなひなさよ体位
正常位

初めての夜

dait@dait1210

おねーちゃんと初めてキスをした時。幸せで幸せで、もうどうにかなつちやいそうだった。今まで生きてきた中で一番幸せだった。これ以上の幸せなんかないって本気で思った。でもあたしは自分が思っている以上に欲張りだったみたい。ついこの間まではおねーちゃんとお話できるだけで幸せだったのに、もつと近づきたくなって、触れたくなくて、キスしたくなくて、そしてその先に進みたくなくて。もうキスじゃ足りない。おねーちゃんの全てが、欲しい。

部屋の電気を消したら、頼りは窓から差すほのかな月明かりだけ。ベッドの縁に浅く腰掛けているおねーちゃんのすぐ隣に座ったら、その肩が小さく跳ねた。緊張してるのかな、手探りで握った手も少し震えてる。でももしかしたら、これはあたしの震えなのかもしれない。さつきから心臓がドクドクうるさいし、喉がやけに乾いてる。

「おねーちゃん」

薄暗いせいでおねーちゃんの表情がよく見えなくて、不安になつて呼び掛けた。変に掠れた声しか出ない。返事は無かったけど、代わりにあたしの手をしっかりと握り返してくれたから、大丈夫なんだ

って安心できた。おねーちゃんはいつだってこんな風にあたしを助けてくれる。愛しい気持ちそのままに、あたしはおねーちゃんの頬に手を添えてキスをした。

まるで一度離れたら目の前の愛しい人が消えてしまうんじゃないかと怯えるみたいに、前のめりになって余裕なく唇を押し付けてしまう。それでも懸命に応えるように唇を寄せ返してくれて、それだけで涙が零れそうになった。閉じている唇の隙間から強引に入り込みそこに見つけた舌を絡ませると、恐々とだけど同じように絡ませてくれた。息をするのも忘れるほど夢中に、その甘さを味わう。おねーちゃんに肩の辺りを二、三度と軽く叩かれて、そこでやっと唇を離れた。

「はあっ……はあ……」

「おねーちゃん、大丈夫？」

「……ええ」

おねーちゃんはあたしの肩に頭をもたせかけて、乱れた息を整えようとしてる。耳にかけていた髪の毛が一房、赤い頬にはらりと落ちていて、それがすごく色っぽい。熱い吐息があたしの首筋に当たってくる。くすぐったくてむずむずして、あたしの頬まで熱く火照つてくる。まだ全然足りなくて、もう一度顔を寄せたら手の平でガードされてしまった。

「日菜、ちよっと、待って……」

その声はかすかに掠れていて、それがやけに扇情的で。はっきり言って逆効果だったけど、あたしはご飯を目の前にして御主人様に待てを命じられたわんこのように、じりじりとしながらも頑張っただけで待つ。ここでご機嫌を損ねられたりしたら大変だ。今日を逃したらもうこれ以上、お預けされるのは耐えられそうにない。

おねーちゃんの呼吸が整うのを十分待ってから、もう一度ゆっくり近づくと今度は拒まれなかった。急ぎすぎたことを反省して、今度はゆっくりと、ついでにむようなキスを繰り返す。あたしのパジャマの裾を握りしめていたおねーちゃんの手を取って指を絡ませた。おねーちゃんの唇が柔らかくて気持ちいいから、すぐにまたキスを深くしたくなるけど、焦っちゃ駄目と自分に言い聞かせる。おねーちゃんが苦しくならないように、キスが長くなり過ぎないように気をつける。そうしてゆっくりキスを続けていたら、薄く開いた口の隙間から今度はおねーちゃんの方から舌を差し入れてきてくれて、その感触だけで一瞬間の中が真っ白になった。

おねーちゃんの体をベッドにそっと横たえようと、長くて綺麗な髪がシーツの上に広がって、月明かりも手伝ってすごく幻想的な光景だった。思わず見とれてしまう。おねーちゃんが不安そうな表情であたしを見上げているのに気がついて、あわてて身を寄せた。その

頬に触れて予想外の熱さに驚く。おねーちゃんの頬が火照っているのか、あたしの手が緊張で冷たくなっているのか、多分どっちもなんでしょう。おねーちゃんを怖がらせないようにできるだけ優しく頬から首筋、鎖骨と撫でていって、パジャマの上からわずかにわかる胸の膨らみに触れた。おねーちゃんの体が明らかに硬直して、思わず手を離してしまう。

「あ、ご、ごめんね！」

「謝らないで」

「えっ、でも……」

「……嫌じゃないから」

そう呟いたおねーちゃんの手があたしの手を包んで、自分の胸の方に導いた。おねーちゃんの頬は薄暗い中でもわかるくらい真っ赤で、恥ずかしがり屋のおねーちゃんのような精一杯の行動が嬉しくて、また泣きそうになる。あたしはおねーちゃんに許されている、受け入れられているんだって実感できた。再び触れた胸は柔らかくて、少し力を入れるだけで容易に指が沈む。やわやわと指を動かして、おねーちゃんの反応をちらっと確かめた。おねーちゃんは目をぎゅっと瞑って、体も強ばっていて気持ちいいのかどうかよくわからない。

力を抜いてほしくて、髪やおでこ、強く閉ざされた瞼、頬、顎と

順番に軽いキスを落としていく。耳にも唇を寄せて、耳たぶを軽く甘噛みするとぴくりと反応が返ってきた。嬉しくて舌でくすぐると吐息が明らかに乱れた。どこに触れたらどう反応してくれたのか、全てを脳に刻み込んでいく。おねーちゃんが可愛く反応してくれる度にあたしのお腹の下の方がずくずくと疼いて、思わず両膝を擦り合わせた。

肌に直接触れたくて、パジャマのボタンに手をかけた。ボタンを外すなんていつもなら片手ではぱっとできるのに、今はなかなか上手くないかな。何でこんなに焦っているのか自分でもよくわからない。なんとか全部を外し終えて、おねーちゃんに起きてもらってパジャマを脱がせる。薄暗い中でもわかるほどおねーちゃんの肌は白い。女同士だし姉妹だし、小さい頃は一緒にお風呂だつて入っていたのに、今はいけないものを見ているような気持ちすら湧いてくる。恥ずかしいのか両腕で胸元を隠すようにしているその仕草が余計に劣情をそそつて、無意識に唾を飲み込んだ。

「日菜……日菜も、脱いで」

「あ！ う、うん、ごめんね！」

またおねーちゃんを待たせちゃつてたみたいだ。さっさと脱いじやいたいの、袖が引つ掛かってじれったい。無理やり袖から腕を引つ張り抜いてシャツを脱ぎ捨て、下も脱ごうとベッドの縁に足を

降ろしたしたところで不意に後ろから抱きすくめられた。

「日菜」

「ど、ど、どうしたの、おねーちゃん？」

おねーちゃんの肌があたしの肌にぴたっと密着してる。今まであたしから抱きついたことは数え切れないくらいあるけれど、おねーちゃんから抱きしめてくれたことなんて数えるほどしかないし、裸で抱きしめられるのはもちろん初めてだしで、喜びと興奮と緊張でパニックに陥ってしまう。暴れまわる心臓が口から飛び出しそうだ。あたしの顔のすぐ横におねーちゃんの顔がある。ふわりと香るおねーちゃんのいい匂い。

「日菜、大丈夫だから」

「えっ？」

「焦らなくても私はどこにも行かないから。……ね？」

そう耳元で囁かれて、頬に優しく口付けられた。いっぱいっぱいのあたしを気遣ってくれるおねーちゃんの優しさが嬉しい。でもこんなことをされたら、落ち着くどころかもう止まれない。

互いに糸纏わぬ姿になって、二人の間に隙間がないほどぴったりと抱き合った。少し痩せ気味のおねーちゃんは、その肩や腰を撫でると薄い皮膚の下に骨の固い感触を感じるけど、抱きしめた体は



驚くほど柔らかくて力を込めたらつぶれちゃいそうだった。できるだけ優しく、おねーちゃんのしっとりとした肌に触れた。柔らかいところ、固いところ、出っ張ってるところ、へこんでるところ。全てに触れて、おねーちゃんを確認する。あたしが今まで知らなかったところも、おねーちゃん自身触れたことがないようなところも全部。全部知りたい、全部触れたい。

手で触れるだけじゃなくて頬ずりしたり、唇でも、舌でも触れた。喉から鎖骨にかけて舌で辿ると、くすぐったいのかおねーちゃんが身をよじらせる。胸元まで辿って、一番柔らかい部分に強く吸い付いてあたしの痕を残した。甘えるように頬を擦り寄せたら、柔らかい膨らみの真ん中に触れる硬くなった感触。そこに軽く口づけると、はつきりとした反応が返る。

「んっ！」

おねーちゃんはすぐに自分の手で口を覆ってしまった。その仕草はとても可愛かったけど、もう一度声が聞きたくて、その手を優しく退かして指を絡めて捕まえておく。また同じところを口に含むと、また上がる声。

「……うん、っ……！」

普段の声より少し高く、そして甘い。おねーちゃんのかなんな声、

今まで一度も聞いたことがない。聞いているだけであたしの体にぞくぞくと甘い痺れが走る。もっと、もっとこの声を聞きたい。吸い付いてみたり、軽く歯を立ててみたり、刺激に強弱を加えてみる。おねーちゃんは口をぴったり閉じてしまって、なるべく声を出さないうよう我慢しているようだった。もっと気持ちよくなってくれば、もっとあの声を聞かせてもらえるかも。そう思って今まで唯一触れてなかった部分、おねーちゃんのぴったり閉じた太ももの間に指を滑り込ませて中心を探った。初めて触れたそこは、ほんの少しだけ潤っていた。

「あっ……！日菜、そこは……！」

「おねーちゃん……！」

短い口づけを繰り返して、言葉の代わりに想いを伝えた。好き、大好き、おねーちゃんの全部をください、って。許しを得るように瞳を覗き込んだら、少し間を空けてから小さく頷いてくれた。それがあまりに可愛くて愛しくて、おねーちゃんの体に覆いかぶさってぎゅーっと力一杯抱きしめた。おねーちゃんがぐすつと小さく笑って、あたしの首に回したその手で頭を優しく撫でてくれた。

もう一度そこに指を伸ばし入口の辺りを何度か撫でるように指を辿らせた。少し迷って、その上の小さい突起にそっと触れた。おねーちゃんの体が強ばって、甘い声を漏らしながらも腰が逃げてし

まう。何度か擦るように触れたら、おねーちゃんがあたしにしがみつきながらイヤイヤと横に首を何度も振った。

「……ひ、ひな、それっ……やっ」

「あっ、ごめん！ やだった？」

「こ、怖くて……」

おねーちゃんの瞳が涙で潤んできて、いったん指を止めた。刺激が強すぎるのかもしれない。優しくしたいのに、感じてほしいから、その加減が難しい。そこへの刺激を止めて、指の位置をずらしでもう一度入口の辺りに触れた。ゆっくりと痛くしないようにしながらおねーちゃんの中に指を沈める。熱いくらいの体温と、きついぐらいの圧迫。覆い被さるあたしの耳元でおねーちゃんがひとつ息を長く吐いて、それに当てられて軽いめまいを感じるほどの興奮を覚えた。あたしが今おねーちゃんにしていること、おねーちゃんが今あたしにされていることを改めて実感する。衝動に任せて指を動かすようになって、ぎりぎりでご我慢した。

「おねーちゃん、痛い？ 大丈夫？」

「んっ……っ……大丈夫」

「痛かったら言っただけ？」

中をゆっくり探るように指を動かしてみる。限界まで指を伸ばして奥まで届かせたり、位置を変えて擦ったり、指を曲げてくいと押

してみたり。声を上げてくれるところ、びくつと腰が跳ねるところ、一つ一つ確かめていく。おねーちゃんの甘く掠れた声上がる度に、あたしの同じ場所にも電気のような快感が走る。触れられたわけでもないのに、滴り落ちそうなほど潤んでいる自分のそこを、無意識におねーちゃんの太ももに擦り付けていた。

「っ……ふあ！ ……っうん！」

「はあ……ねえ、おねーちゃん、気持ちいい？ねえ……」

余裕なく息を乱しながら、でも確かにあたしの目を見ながら頷いてくれたおねーちゃん。あたしも余裕なく夢中で指を動かしてしまふ。おねーちゃんの吐息とあたしの吐息がどンドン短く浅くなり、そして重なっていく。あたしは熱に浮かされたように、何度もおねーちゃんを呼んだ。

「おねーちゃん、好き……おねーちゃん……」

「ひ、ひなあ……っ……！」

おねーちゃんの声が一段と高くなって、腰はびくんびくんと震えている。指の動きを強めて、おねーちゃんが気持ち良さそうなどころを何度か押すように擦ると大きく腰が跳ねた。あたしの首をかき抱くおねーちゃんの腕に痛いくらいの力がこもる。同時に、あたしを中心にも大きな痺れが走った。まだ震えてるおねーちゃんの体を、上手く力が入らない腕でなんとか抱きしめる。キスをねだるように

顔を寄せられて、またあだし達の唇は重なった。

目が覚めたらまだ部屋の中は薄暗くて、朝なのか夜なのかもわからなかった。枕元のスマホで確認して、今が夜明け前であることを知る。あだしの腕の中ではおねーちゃんが穏やかな寝息をたてている。心地よい気だるさの中で、ゆるゆると抱き合っている内にいつの間にか二人とも寝ちゃっていたみたいだ。

おねーちゃんの顔にかかる髪をさらりとかき分けて、その額にそっと触れるだけのキスをした。昨夜のことを思い出すと愛しさが溢れてきて、思わず抱きしめた腕に力がこもりそうになる。でもこの可愛い寝顔をもう少し見ていたいから、起こさないように気を付けなきや。

ずっと、おねーちゃんの全部が欲しかった。想いが通じて、こうして体を許されて、そして今、まだ足りない、まだ満たされない、と思っっていることに気づいてあだし自身戸惑ってしまう。おねーちゃんさえ側に居てくれたらあだしは最強無敵だと思っっていたのに、今はむしろ弱くなってしまった気がする。鼻の奥がつんとしてきて、思わずおねーちゃんの首もとに擦り寄った。こんなに幸せなのに、なんで涙が出てくるんだろ。

「……日菜？」

「あ、ごめんね、おねーちゃん。起こしちゃった？」

おねーちゃんはまだ半分夢の中なのか、ぼんやりした表情をしている。あわてて涙を隠そうとすると、あだしの目尻に優しく口付けて今にも零れそうだった涙を拭い取ってくれた。驚きで固まるあだしの頭をその胸に抱き寄せて、ぼんぼんと優しく叩いてくれる。おねーちゃんの胸の中は温かくて、その熱があだしの涙を全部溶かしてくれるようだった。あだしはここにいていいし、おねーちゃんはここにいてくれる。おねーちゃんの胸から聞こえる穏やかな心音を聴きながら、あだしは安心してもう一度幸せな夢の世界へと落ちていった。

ろく(挿絵)

好きなひなさよ体位
騎乗位

special guest
ちき (小説)
twitter@shion_chicky

好きなひなさよ体位
対面座位
(※締め切り10時間前に唐突に
誘ったら快くお受けしてくれました)

紗夜ちゃん、日菜ちゃん、スカート逆じゃない??

ちき

「おねーちゃんと一緒にお仕事できる日が来るなんて、思ってたな
かったな」
撮影スタジオの控え室でのんきにくつろぐ日菜に、私はため息
を一つ。

「はあ……あなたが取材でも収録でも所構わず私の話ばかりする
からじゃない」

「話したいことを話していいって言われたから話したただけだもー
ん」

日菜はまるで悪びれる様子もなく、へにやと笑った。

日菜の所属しているパステルパレットは今や人気アイドルの一
角で、さすがに毎日とまではいかないが、週に二度くらいはテレ
ビで見かけるようになった。

日菜の活動が認められる、それはきつといいことなのだろう。
しかし問題は、トークの内容。二言目にはおねーちゃんおねーち
ゃんと、双子の姉——すなわち私の話ばかりするものだから、私
まで有名になってしまった。そしてついに、アイドルでもタレン
トでもないのに日菜経由で「お姉さんと一緒に」と、動画サイ
トのPRの仕事を振られてしまったのだ。

先方はあくまで私たち姉妹を起用したいらしく、それもかなり
大手の動画サイトからのオフアールということで、日菜のために仕
方なく引き受けたのだけど。

「……どうして私まで、こんな衣装を」

私たちに渡された撮影用の衣装はアイドルの着るようなもので、
もちろん日菜はアイドルなのだから当然としても、一般人である
私まで同じような衣装を……でも確かに日菜がアイドル衣装で私
が地味な私服では統一感がないし、いやでも……、などと考えて
いるうちに日菜はどんどん着替えながら、私に熱い視線を送って
いる。

「おねーちゃん、着ないの?」

……ここまで来て、着ないわけにはいかないだろう。事前に衣

装を確認しなかった私の落ち度もある。とにかく今は衣装を着て、
サイズが合うか確認しなければ。あと数十分で撮影が始まってし
まう。

「着るから、あつち行つてなさい」

一人分しかない着替え用のスペースで日菜は、カーテンも閉め
ずに着替えている。だったら私にその場所を譲ってくれてもいい
でしょう?

「え、なんで?」

……?

「今から、私も着替えるから、よ……?」

どうして日菜がそんな不思議そうな顔をしているのか、私には
不思議でならない。

「……裸はいいのに、着替えはダメなの?」

「ひっ、日菜っ!」

慌ててあたりを見渡すも、当然室内には私たちしかいない。ド
アの外には聞こえていないだろうけれど、心臓が悪い。

「そのことは外では言わない約束でしょう。守れないのならもう
しないわよ」

キッと睨みつけると日菜は少しシユンとして、「待て」をされた
子犬のようにしおしおと着替えスペースから出て椅子に座った。

私はカーテンを閉めると、改めて自分の着る衣装を見つめる。

日菜の衣装はひらひらしていて、肩やお腹が見えていた。日菜
らしく可愛い衣装。一方私に渡されたのは、カラーリングこ
そ似ていれど、形はまったく違う制服のような衣装。ネクタイや
太めのベルトもあり、落ち着いた印象を受ける。企画を考えた人
は少しはまともな人らしい。もし日菜と同じ衣装を着ると言われ
ていたら、怒って帰っていたかもしれない。

着ていた服を手早く脱ぎ、衣装に袖を通す。スカートを穿いて
ベルトを締め、サイハイソックスも穿く。ネクタイに少し苦戦し
て、ヘアピンをつける。靴と手袋はサイズを確かめて、一度外し
ておく。別の部屋でメイクをするから、その後で改めてつけよう。

着替えを終えてカーテンを開くと、まだ着替え終わっていない
ほぼ下着姿の日菜と目が合った。

「……」
日菜はただ無言で、私を見つめる。

「日菜……？」

私の呼びかけにも答えず、ただゆらゆらと近寄ってきた。

「ね、おねーちゃん、まだ時間あるよね？」

たしかに、予定ではまだ三十分くらいあるけれど。

「……何、するつもりよ」

そんなこと、日菜の目を見れば聞くまでもなかった。

至近距離で見つめられて目をそらした私の首に、日菜の腕が回される。甘い匂いが柔らかな温もりを伴って唇に触れた。そのまま体重をかけられて壁際に押されながら、さつき開けたばかりのカーテンをとつさに閉める。

「おねーちゃん……」

唇を合わせたまま呼ばれ、思考が蕩けた。私は、日菜の甘えた声に弱いらしい。

「ひ、な……」

呼び返すと日菜は嬉しそうに目を細め、私の腰に手を伸ばす。

……いつ、人が入ってくるかもわからないのに。

カーテンに包まれた小さな密室の中で、日菜の手が私の全身を撫でる。触れるか触れないかの微弱な刺激に、もどかしさばかりが募る。私も日菜にしがみつきながら、右手を闇雲に動かした。立っているのが精一杯で、日菜のような余裕はない。けれど真つ白な意識の中で、自分の太ももを伝う水滴に気づく。

「衣装つ、汚れちゃ……っ！」

これから撮られるというのに、恥ずかしい染みを作るわけにはいかない。だから今はこれで終わり。

——そういう意味で言っただけだったのに。

「うん、脱がすね」

ベルトを外され、スカートがストンと落ちる。そしてそのままショーツまで下ろされてしまった。湿ったそこが外気に触れて、スースーする。

「日菜っ、違……」

止めようとしても手遅れで、私のそこに添えられた日菜の指は

簡単に沈んでいく。やめようと思っていたなんて今さら言っても説得力がないくらい、私は日菜を求めてしまっていた。

「待って、待ちなさい、日菜」

ほんの数秒触られただけで果てそうになり、慌てて日菜の指を抜く。

「……おねーちゃん、こんなになってる」

日菜の指には私から出た粘液がぬるぬると絡みついでいて、指の間だけでなく、「私」からも糸を引いている。

「みっ、見な——」

手を押さえようとしてももう遅く、日菜は事もあろうかその指を自らの口に運んだ。「私」と日菜の口が、私の分泌液で繋がる。

「おねーひやんの味」

顔がカッと熱くなつて、耳まで真つ赤に染まる。

「いい加減にしなさい！」

啜えている指を口から引き抜かせると、今度は日菜の唾液と混じって指と口に透明な橋が架かった。

「えへへ、おねーちゃん真つ赤だ」

何故か嬉しそうな日菜は意地悪く笑うと、蛍光灯をてらてらと反射する指を再び私のそこに押し当てる。陰裂に沿って擦られ、蜜が溢れた。

「おねーちゃん、ここ、気持ちいいでしょ？」

そう囁く日菜の熱い吐息が鼻にかかる。無意識にキスを求めて目を細めた私に、日菜は一瞬だけ唇を合わせた。浅く入れられた指を小刻みにくにくくと動かされ、また上りつめる。くちゅくちゅと恥ずかしい音が部屋中に響き、私から垂れたものがソックスに染みを作り始めた。

「や……っ、んっ……っ！」

日菜のしなやかな指が、奥まで入ってくる。弱いところをピンポイントに責められ続け、立っていられなくなった私は日菜の肩にしがみついで喘ぐ。

「ひなっ、待っ……っ！」

私は日菜を力一杯抱きしめながら、絶頂を迎えた——のだけれど、日菜は止まらない。

敏感になった私のそこは、もつと日菜を感じようと、日菜の指をきゆうきゆうと締め付ける。意に反して、私の体は必死に快楽を貪る。日菜の耳元で恥ずかしい声が何度も漏れた。

「ん……、あは……っ」

日菜が私の脚に股を押しつけて、ショーツ越しに水音を立てる。柔らかい肉の触感に、夜のことを思い出してしまふ。

「おねーちゃん、あたしの、触って……」

日菜は焦れるようにそう言うと、タイトとショーツを一気に膝までずり下ろす。全然触っていないはずの日菜のそこはすでに私と同じくらい濡れていて、ショーツの内側をグショグショに汚していた。太ももを伝った液体が、官能的に揺らめく。

日菜に手を取られて「中心」に触れるとそこはとつくにほぐれていて、いつもより熱くぐにぐにしている。吸い込まれるように奥へ奥へと入っていった指が溶けそうなほどに。

頑張つて手を動かそうとしても、日菜も私の中で指を動かすから、どうしてもそちらに気が逸れてしまう。こんな状況で日菜を気持ちよくさせることに集中なんてできない。何度目かわからないほどイカされて、力が抜けて壁にもたれかかる。それでも日菜は止まってくれやしない。

「や……、も、むり、——ひにや……っ！」

私が一番深い絶頂を迎えようとした瞬間——。

ドアをノックする音と、「お二人とも、サイズ大丈夫ですか？」

まず日菜さんからメイクを——」などというスタッフさんの声。

文句を言いたそうな日菜にキスをして黙らせて、ゆっくり指を抜く。室内の水道で手を洗わせると、しぶしぶといった様子で日菜は着替え始める。私も着替えようとして、下半身の状態を思い出した。仕方なくティッシュで拭き取って、まさか部屋に捨てていくこともできず、ビニール袋に入れてポーチにしまふ。日菜がショーツの中をぬぐったティッシュもまとめて袋の中に。

「ごめん、先行くね！」

スカートのベルトを留めながら足早に去る日菜を見送りながら私は先ほど脱がされたスカートを——私のスカートはどこ？

着替えスペースの中にも、机の上にも、椅子の下にも、どこに

も見当たらない。代わりに、日菜が着るはずのスカートが吊されたまま残っている。ということとは……。

「日菜！ そのスカート……はあ、まったく」

とつくに部屋から出て行った日菜に声が届くはずもない。取り残されているのは私とひらひらのスカートだけ。きっと日菜はもうメイクをし始めているだろうし、私も早く行かないといけない。向こうで着替えている時間もないだろう。

「紗夜さんもそろそろ準備お願いします」

扉の向こうからスタッフさんに呼ばれ、私は覚悟を決めた。

「あれ？ おねーちゃん、なんであたしのスカート穿いてるの？」

「あなたが間違えたんでしよう……」

そうじゃなきゃ、こんなスカートなんて。

「それにおねーちゃん、顔赤くない？」

「それはあなたが途中で——」

言いかけて、固まる。数分前の痴態に、今さら恥ずかしさが襲ってきた。

「ね、おねーちゃん、耳貸して？」

しやがむようジェスチャーする日菜の口元に耳を寄せると。

「続きは、帰ったらね？」

日菜はそう囁いて、悪戯っぽく微笑んだ。

参加者さんへの感想、お待ちしております！
もらった感想は後日参加者の皆さんに送ります。
(合同って感想もらいにくいらしいです…)



googleアンケート
フォームに飛びます！

あとがき

現在6月28日朝の4時です。当直便の締め切りまでのこり4時間を切りました。締め切りがギリギリになってしまい不甲斐ない主催で申し訳ないです。

参加していただいた皆様とこの本を手にとってくださった皆様に感謝を申し上げます。

この本で氷川姉妹に関する本を編集したのは7冊目となります。10冊まで出してみたいですね…！

初同人でここまで好きで続くのはやっぱり公式が定期的に供給してくれるおかげだなあと常日頃思います。

ですが今はいつかくるドリフェス日菜ちゃんに怯えています。

氷川姉妹18禁合同
「今日是一緒に寝てもいい？」
発行：いしやきいも(いしだ)

2019.6.30.

guildlay@gmail.com

栄光印刷



presented by
ISHIYAKIIMO